
coup d'Etat

へんだー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c o u p d · E t a t

【Nコード】

N 5 7 5 0 M

【作者名】

へんだー

【あらすじ】

前作、invisible/invincibleで起きた事件。J's事件から三年後。その時に発覚した戦闘機人という違法技術を基にした、『特甲』という技術が生まれた。本来ならば、認められるはずのない技術であるが、社会に溶け込んだ戦闘機人の人権をより認めやすくするための処置である。それにより、『普通』とは違う生まれをした人々が、『普通』に生活できるようになっていた。

しかし、それは同時に一部ではあるが質量兵器を認められることにもなり、先の事件より信用が落ちた管理局へのテロ行為がさかんになっていた。

特甲局員である少女、睡蓮・ナユタ・シュレイリンガーは、機械化された手足で、銃弾と魔法弾が飛び交うミッドチルダを駆け抜ける。

この作品は、同作者の作品である、invisible/invisibleの続編となっております。そのため、前作をお読みになってからでないと、分からない部分が出て来てしまうため、予め前作を読んで頂きたい思います。

最後になりますが、このお話しを読んで頂いた全ての方に感謝を。

α / i n t r o d u c t i o n (前書き)

初めまして、お久しぶり、こんにちは。

へんだーと申す者です。

このお話を手にとっていただき、ありがとうございます。

この場をお借りして、深く御礼申しあげます。

さて、ここでは簡単な登場人物紹介をしたいと思います。これは、本編のネタバレになるような部分はありませんので、初めましての方も、お久しぶりの方も読める安心設計になっております。

では、どうぞ。

α / introduction

睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー

本編の主人公。前作の戦火に巻き込まれ、四肢と家族を失った少女。与えられた特甲を専ら憤怒の捌け口に使用する。

性格は短気かつ横暴。目立つ敵にはすぐにつつかかる。タイムンを常に望むボクサー。

喫煙者で、ショートホープを愛煙する。

余談だが、貧乳であることを気にしているらしく、毎日牛乳を欠かさない。

シュガー・レイ・マデューカス

前作の主人公にして、本編のもう一人の主人公。失われた腕を特甲で補う、元暗殺者兼殺人鬼にして、現兵士兼殺人鬼。

マキナがからむと容赦無く殺人鬼スイッチオン。

運が悪く、よく貧乏くじを引かされたり、腕をすつとばされたり、グータラな上司から仕事を押し付けられたりする。

最近の悩みは、マキナにどうやってプロポーズするか、である。

喫煙者で、睡蓮と同じくショートホープを愛煙している。

マキナ・マデューカス

マデューカス姓をシュガーから貰ってすっかりお嫁さん気分。籍は入れてない。

薬物汚染から解放され、髪も元の色を取り戻した。

しかしながら、機械仕掛けの神とリンクしたことから、超演算能力に加えて莫大な魔力を得たことで、体は常に悲鳴を上げている状態。魔力封印をしてなんとかしている。

今回の戦いが始まる前に、丘の上の十字架に掛けられていたラピスラズリをお守り代わりに持っている乙女。

ジェーン・スミス

たぶん本編最強キャラ（笑）。インターセプターの会長。圧倒的な権力（偽）と、圧倒的な情報量で人を陥れ、おちよくる悪魔。

先の戦いで失った足や視力は特甲義肢、義眼で補っている。

ちなみにシュガーのものを含め、インターセプター会員の特甲はインターセプター製である。

イメージカラーは赤なはずだが、とても黒い年齢不詳の女性。

喫煙者で、吸う銘柄は特に気にしない。マルボロブラック、赤マル、JPSを好むようだ。

フローラ・ベヘレン

深窓の令嬢のような容姿を持つ、ハイパー貧乏かつ苦労人。
常に睡蓮の理不尽に振り回されている。彼女は第二世代特甲局員で、
疑似魔導師とも言える存在。
卓越した狙撃能力を持つ電波娘。

黒崎 綾乃

フォワードリーダーなクールビューティ。長ドス型のデバイスを振り回す女の子。
天然ものの少女の言動や行動に常に頭を抱えている。

エルマ・ラヴェス

天然もの。
野性的な勘を持つが、別に野生児という訳ではなく、天性のもの。
道端の草花を踏むことすらためらう、優しい心の持ち主。
好きなものは平和と真面目に発言してしまうお茶目さん。

ベネディクティン・アレクレーン

魔導師ランクSSSS+（測定不能）を持つ、バグキャラ。
王たる風格と、少女のような純真さをもつセクシーレディ。

α / introduction (後書き)

本編を読んでのご感想やご指摘があれば、感想の所まで気軽に書きください。

では、後書きでまた会いましょう！

Phase? / the water lily / 00 / death

空が灰色だった。別に今日の天気が曇天な訳ではなく、灰色の何か
が空を埋め尽くしているのだ。

少女と家族はそれから必死で逃げる弱者。魔導の力を持たず、特殊
な力を持っているわけでもない。

灰色の閃光はまるで雨のように降り注ぐ。
それは、あまりにも平等過ぎる死だった。

少女とその家族は確かに弱者であったが、その閃光はあまりにも平
等で、魔導の楯を容易に貫いた。

少女は恐怖とともに、マグマのように煮えたぎるような憤怒をおぼ
える。

何故、こんなことになっているのか。
何故、自分達は死にかけているのか。

聖人であるつもりは無い。けれども、こんなにも理不尽に殺される
ほど悪人になったつもりもない。

少女は、地面に拳を叩きつけようとして、自分の腕が無いことに気付く。腕だけでなく、両の足も無い。
達磨状態の体で必死に周りを見れば、命の無い家族が見えた。

憤怒。 苛烈な憤怒。

不思議と死の恐怖は無い。 何故ならば、少女には憤怒以外の感情が無いからだ。

不思議と痛みは無い。 何故ならば、痛みさえも殺されているからだ。

怒り、やがて少女は静かに目を閉じる。 死を受け入れたわけではない。 この怒りをぶちまける準備をするためだ。

それが可能となる時まで。 それを可能とする力を手に入れるまで。

少女は、目を閉じた。

時は新暦0075年。少女の十五歳の誕生日のこと。物語は、この日から三年の時を経て開幕する。

01 / reborn

「暑いー。つか、熱いー」

炎天下。狂ったように燃え盛る太陽。それによって熱せられたアスファルトは、さながら屋台の鉄板のよう。

で、あるならば、そこに這いつくばる自分は、美味しくただかれてしまうのだろうか、などと笑えない冗談を考える。

大の字に寝たまま、うざったい太陽を自分のモノではない右手を突き出して遮る。

特殊魔導機械装甲義肢。通称、特甲。

なんらかの理由で四肢を失った十八歳未満の少年あるいは少女に与えられる機械の義肢で、適正さえあれば、家柄・財産・出身…その他諸々に関係無く与えられる。——三十年間、管理局での労働を約束するのと引き替えに。

少女Ⅱ^{スイレ}睡蓮・ナユタ・シュレイリンガーは、三年前のJ・S事件に巻き込まれ、その四肢と家族を喪った。リンカーコア/魔法の力の無い少女の家族は、迫り来る暴力に抗えず、あっさりと死んだ。

死にかけの少女が欲したのは力。復讐のためでもあるが、それ以上に、己を脅かすもの、憤怒をおぼえさせたもの、そして脆弱過ぎた自分を殴るための力。

そんな彼女は、特甲児童になることが許される年齢であることを知って歓喜し、すぐさま痛みを無にして思いっ切り“敵”を殴れる四肢を欲し、手に入れた。

そんな睡蓮〓地面に寝っ転がったまま、ショートホープをズボンのポケットから取りだそうとして、両腕が特甲のままであることに気付く。

装備の返送をするか？ いや、めんどくせー〓一瞬の思考。

無理矢理手をポケットにねじ込み、タバコとライターを取り出す。

ライター〓白地に青いクロスがあるジッポライター。

そして、『すっぱー』と解放感溢れる吸いっぷり。

くわえタバコのまま、青すぎる空を眺める。行き交う雲を何かに例えた幸せ【だった】幼い頃を思い出し、少し気分がブルーになった。ああ、やれやれ。

「あー、どっかのタコがテロでも起こさねえかなー。思いつきり殴りてえ」

管理局員としてはあまりにも問題のある発言を咎める者「無人の訓練施設には一切無し。最高。」

いつの間にか、タバコをくわえた口元がゆるむ「あーなんて単純な自分。最悪。」

そんな睡蓮の思考を知ってか知らずか、顎部に埋め込まれた念話・通信専用超小型デバイスが、アラート音とともに、質量兵器で武装したテロリストの出現を告げる。

J・S事件解決後に一部緩くなった時空管理法（「その最たる例が特甲」）により、質量兵器を用いたなんちゃってテロリストが増加。先の事件も相まって、管理局への不満／生活の不安／非魔導士への待遇の不満／ついでに常人には理解できない正義の主張を、銃口から吐き出す。

「第一世代特甲局員である睡蓮の管轄。」

「あー、いたー！！　　ホラ、アラートが鳴ってるでしょ？　　早く行こっ！」

若干のメランコリーに浸っていると、訓練施設の入り口から声。睡蓮とコンビを組んでいる、カードリッジシステムを応用した疑似リンカーコアによって、時間制限付きであるが魔法戦闘を可能にした第二世代特甲局員の少女。人口臓器を多数用いるため、本人の強い要望・適正そして、人口臓器を使用しなければならぬ一定レベル以上生命の危機が無い限り、許可がおりない。

そんな彼女を視界に捉えた睡蓮は、やれやれと立ち上がってタバコをぷつと吐き捨てると、靴底で踏み消して歩き出した。

新暦0078年。力を手に入れ、再誕した少女の物語が始まる。

02 / s c a r l e t i r o n f i s t s

《あわわー！ 助けてくださいーい！ー！》

地上20階建てのビルの上で、優雅にスモークタイムと洒落込んでいると、脊髄が痺れるような大音量で念話が鳴り響く。少女「つり上がった勝ち気そうな赤銅色の瞳／サラサラと風に揺れる無造作に切られた白い髪は、本当に面倒そうに溜め息を一つ。ついでに有害物質の煙が青空に排気される。

《やかましいぞタコ。オレの唯一の楽しみを邪魔すんじゃねえ》

《だって……》

弱々しい返答。恐らくは念話の向こうで、気の弱い——なぜ武装隊を志したか甚だしく疑問が残る——少女が涙目になっているだろう。けれども彼女にとっては明日、世界が滅ぶかもしれないと心配するよりどうでも良かった。何よりつまらない。眼下で繰り広げられる銃撃戦は、まるで陰湿な罵りあいのように、性に合わない。

つーかアレ打ちてーよアレ。アルカンシエル。

眼下に広がる光景を、このクラナガンの街ごとぶっ飛ばしてくれるに違いない。

——などと無意味な思考を零コンマ二秒ほど。

少女／彼女＝睡蓮・ナユタ・シュレイリंगाーは、くわえタバコのまま、ビルの屋上からダイブ。空中で顎部に埋め込まれた専用デバイスによる声無き声で呟くと、四肢が真紅を帯びて変化する。両手の甲から肘にかけては、それぞれ丸みを帯びた長方形の魔力雷撃機に。両足は、革製のブーツから、象に足を踏まれても平気そうな安全靴（足の裏に鉤爪つき）。

睡蓮は、少女とその敵／約十名のテロリストの丁度中間地点に、降り立つ。獣のように身を屈め、落下の衝撃を殺す。しかしながら、その冗談のような衝撃を完全に消し去れるはずもなく、アスファルトには蜘蛛の巣のようなヒビが入る。

背後の少女＝フローラ・ベヘレン／綺麗に肩口で切り揃えられた金髪・碧眼／絵に描いたようなお嬢様（実際には超貧乏）が、また始末書がくとわめくが無視。

そんなことよりと、睡蓮は未だに驚きに目を見開くテロリスト/今回の犠牲者を睨み付け、晴天を突き刺すように高々とファックサイン。

「懺悔の時間をくれてやるよ、負け犬野郎ども!」

瞬間、睡蓮に殺到する鉛玉。あーらら、地獄逝き決定だわ、と睡蓮は嘆息/溜め息/タバコをぷつと路上に吐き出す。

睡蓮「殺到する弾丸よりも速くテロリストに向かってダッシュ。

弾丸「当たらない/当たらない/当たらない。

フローラ「ひゃっ、と可愛い声を上げながら慌てて防御魔法。

弾丸がフローラの防御魔法に着弾するより速く、睡蓮が一番近くにいた男の顔面に左フック/魔力雷撃値20%以下。男は驚愕するヒマもなく、竜巻よりもタチの悪い拳に飲まれ、ぶっ飛ぶ。漫画のようにぶっ飛ぶ男に巻き込まれ、直線上にいた三人の男も巻き込まれるが、近くの建物/テロリスト達が狙った時空管理局クラナガン陸士101隊詰所に激突するまで止まらない。

爆発音とともに、詰所のロビーが混乱状態——にはならず/すでに事務員は退去済み、代わりに念話で怒りの声。曰く、詰所を壊すな。

が、睡蓮は当然の如く無視。だが、文句を言われて若干のストレスを感じる。決めた。このテロリスト達はオレの会心の一撃でぶっ飛ばす。

睡蓮は更に、くつきり（ばつきり）と足跡を残して地面を蹴る。慌てるテロリスト達だが、あまりにも遅い。構え、照準を合わせ、引金の三アクションの間に、真紅の電撃ノ魔力帯びた拳が、三発飛んで来る。

テロリスト「飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ。」

街「壊れる、壊れる、壊れる。」

やがて、残ったテロリストは一人のみ。睡蓮はその一人を見て獰猛に笑う。

「——アーメン、クズ野郎」

その最後の一人が後に覚えていたのは、この時までだった。

「やってくれたな、この馬鹿者め」

事後の現場検証という名の後片付け。質量兵器を忌避し、人体が傷つかないクリーンなエネルギー／魔力を用いたにも関わらず、容疑者全員に少なくとも骨折以上の重症を負わせた馬鹿に説教をする時間。しかしながら、その説教を受けている当人は全くの上の空。憎たらしいくらいに澄みわたる青空を睨み、溜め息。

それを見た陸士306隊隊長は怒りが天元突破。怒りに任せて睡蓮の脳天に拳を落とすが、睡蓮は難なく回避。それが余計に怒りを焚き付ける。

フロアはいない。既に隊舎に戻り、睡蓮の後始末に奔走中。大部
分は睡蓮が壊した物の請求書。

そして、あー説教なげーな。などと考える睡蓮。自分の行動／態
度がその原因を作っていることなど考えていない。

「ちつ、まあいい。どうせお前は異動だ。ようやく問題児から解放
されて清々する」

次々と病院に運ばれていくテロリストの諸君を眺めつつ、睡蓮は思
う。

【だらうな】

「で、今度はどこだよ？」

やれやれ、と肩をすくめる睡蓮。ついでに退屈しない場所だと良い
なあ、とぼやく。

みしり〓隊長が持っていた異動書類を握り潰す音。

「やかましいわ！！　この書類に詳細は書いてある！！　さつ
さと荷物をまとめて行っちまえ！！！」

凄まじい声量がクラナガンの街に響き渡る。周辺の住民が何事かと
身を乗り出し、陸士隊の面々は精一杯の他人の振り。まあ、無駄で
あるが。

睡蓮は、へいへいとぐしゃぐしゃになった書類を受け取り、乱暴に
ズボンの尻ポケットに突っ込んで踵を返す。ポケットからタバコ/
ショートホープを取り出し、火をつけて歩き出す。

周りの大人〓眉をひそめるものの、何を言っても無駄だと、十八歳
の少女の喫煙を咎める者は一切無し。

睡蓮は、その状況にくつくつと笑いながら、自室へと帰っていった。

「お疲れ様です、隊長」

「19・2%」

「え？」

睡蓮が去った後の事件現場。彼女に異動を申し渡した部隊長は、意味深にとある数字を呟く。問題児との一悶着を労いに来た副官は、はてと首を傾げた。

「ヤツが一番始めにテロリストを殴った時の特甲の出力さ。相手がギリギリ死なず、かつ自分の拳に『人を殴った感触』が最大限に伝わる、絶妙な数値だ」

副官／驚愕に目を見開きながら、隊長が見ていたデータ端末を横から覗き込む。

「これを、自分の意思で調節しているとしたら、凄まじいセンスですね」

副官のその評価に、隊長はふんと鼻を鳴らす。認めたくは無いがその通りだ、という意味を込めて。

「やれやれ、アイツの性格がちったあマシだったらこんなに隊をたらい回しにされることは無いんだろうがな。これだけのバトルセンスを持ったヤツはそうはいない。それに、大人でもトラウマものの地獄を、まるで大好きなスポーツを楽しむみたいにくぐりぬけて来やがってる。アイツは間違いなく逸材だよ。腹立たしいがな」

やれやれ、と溜め息をつきながらデータを閉じる。

「さて、あの馬鹿の後始末をするか。副官、まずは――」

「任務完了。管理局地上本部少将、グレイ・ナハトマの死亡を確認」

白昼のテロ事件から八時間後。深夜零時のミッドチルダにて、一つの死体が出来上がっていた。死体の前に佇むのは一人の青年。夜陰に紛れる黒髪に、自分のモノではない機械の右腕。彼本来のモノである左手には、赤紫色の短刀が握られている。

「了解。任務は終了だ、シュガー。帰ってゆっくり休んでくれ。マキナが文句を言ってたぞ。仕事ばかりでかまってくれないってな」

青年「シュガー・レイ・マデューカスは、中年男の死体の前で困ったように笑った。おおよそ、闇に包まれていたこの場では相応しくないであろう表情を見せる。」

「ジーン隊長、マキナに言っておいてください。前に職人に頼んでおいた指輪を受け取ってから帰るから、もう少し帰りが遅くなる。それじゃあ、通信を終了します」

「はいはい。さっさとそのもう一つの【仕事】も終わらせて帰って来いよ。それじゃ、テキトーに幸運でも祈っておく」

シュガーⅡ通信を切ると、ポケットからショートホープを取り出して着火。

短刀型デバイス・アメジストを懷のケースにしまう。

「さて、お姫様が本気で怒り出す前に行くとするか」

その眩きとともに、シュガーはその場から転移した。

睡蓮は絶賛憂鬱モードであった。形の良い唇を尖らせて、ただでさえあまり良くない目つきをさらに鋭くしている。

その原因〃一枚の異動命令書類／曰く、化け物揃いの再設部隊・機動六課への異動。

ふっざけんなー！ と叫び出したい心境であるが、移動の電車内／目の前で自分の巻き添えをくらった眠れるお姫様〃前回の後始末でかなりお疲れなフローラを見て自重した。

仕方が無いので、ささやかな悪戯をフローラに仕掛けると、自分も目的地まで寝ることにした。

クラナガン郊外に到着した睡蓮とフローラは、一悶着あったものの（「睡蓮の悪戯。顎部に埋め込まれたデバイスに細工し、目覚まし音を緊急アラート音に変更」、無事に機動六課の新しい隊舎たどりついた。

未だにブツブツと文句を言い続けるフローラを横目に、睡蓮はくわえタバコのまま知らん顔。

しかしながら、機動六課の隊舎を見たフローラは目を輝かせた。

睡蓮「むっつり。

「わあ、ここつてJ・S事件の英雄がたくさんいる所ですよね！？
楽しみだなあー！　睡蓮ちゃんとコンビ組んでから何回も異動させられたけど、今回は睡蓮ちゃんに感謝です」

フローラのキラキラした目と、ついでに出てきた皮肉を受けて睡蓮は思う。

うぜー。

睡蓮にとってはJ・S事件は思い出したくない出来事の一つであり、

原初の憤怒である。自分が『こうなった』理由。自分が『こうされた』理由。

もっと早く機動六課が動き、もっと早く機械仕掛けの化け物を倒していればこうはなかった。

「公式の発表では、機械仕掛けの神を倒したのは、機動六課メンバーとなっており、そのメンバーリストに、無影の暗殺者／殺人鬼の名前は無い。」

あーまあ、勝手な逆恨みなんだが、と頭をかく睡蓮。同時に、そうでも思っただけやあってらんねーとも思う。

睡蓮・ナユタ・シュレイリンガーの生きる原動力は煮えたぎる憤怒。その赴くままに、睡蓮は拳を振るい続けるだろうから。

「どうしました、睡蓮ちゃん？」

はて、とそんな睡蓮を見て首を傾げるフローラ。

「別に。なんでもねーよ」

睡蓮は慌てて顔を背ける。このパートナーは妙な所で勘が鋭い。この電波的勘とデスクワークの有能さが睡蓮がフローラをパートナーとし続けた理由なのだが、今この時は余計だと、舌打ちを一つ。

未だに首を傾げたまま動かないフローラを無視し、睡蓮はズカズカと隊舎入り口に歩き出す。

「あ、ちょっと待ってくださいよー!!」

燻り続ける憤怒と、ほんの僅な期待を胸に。

クラナガン近郊のとある街角。一人の少年がフルートを吹いていた。それは誰もが溜め息をつくような、美し過ぎる音色。しかしながら、狂氣的な天使の姿を同時に瞼の裏側に焼き付けるような、おぞましさがあった。

少年「「櫛」スノウ・ホワイト」。真っ白な髪に赤い瞳の所謂アルビノ/それらを隠すような、純白のフード付きコート/ひたすら目を引く左目下の十字架の刺青。

優しげな表情を浮かべた美少年である。

そんな櫛の演奏を聞く者はいない。無人の街角で彼はフルートを吹き続ける。

——そう、その街角に、【生きた人間】は一人としていなかった。

極秘【Top Secret】

本日、八月四日午前五時頃。クラナガン近郊。陸士201隊舎が何者かに襲撃された。隊舎に待機していた武装局員を含めた全67名が殺害されている。

監視カメラ等は全て破壊されていた上に、目撃者も全て殺されているため、明確な犯人像は掴めていないが、全ての遺体が頭部を実弾で撃たれて絶命していることや、その弾丸が首ごと飛ばすほどの異常な火力を有していることから推測すると、容疑者としては、レベル3の特甲を標準装備とする、第零世代特甲局員が考えられる。

第零世代特甲局員の不安定性・危険性・管理局内不穏分子との関連性を考慮すると、早急な対処を、インターセプター【脅威を阻止するもの】に依頼する。

武装隊栄誉元帥

ラルゴ・キール

睡蓮とフローラの二人がロビーで異動書類を提出し、案内されたのは部隊長室だった。

対照的な二人の姿に、案内役となったフェイトは苦笑を禁じ得ない。仏頂面で目つきの悪い美少年のような美少女と、キラキラと目を輝かせて自分を見つめる美少女。

と、目つきの悪い少女。睡蓮が、タバコをくわえようとしたので、フェイトは慌ててそれを止めた。

その光景を微笑ましく眺めていたのは部隊長・八神はやてである。

しばらくこの微笑ましい光景を眺めていたい衝動に駆られたが、いつの間にか緩んでいた顔をきゅっと引き締めた。

「良くきてくれたなあ、睡蓮ちゃん、フローラちゃん。私が機動六課部隊長の八神はやてや。二人を案内してくれたのは、フェイト・T・ハラオウン執務官。二人の所属する、ライトニング分隊の隊長や。よろしくなあ」

睡蓮「……………」無言。吸おうとしたタバコを乱暴にしまつてはやてを睨む。もつとも、本人としてはそんなつもりは無いが。

フローラ「よろしくお願いします！」と元気に敬礼。同時に、「ダメだよ、睡蓮ちゃん」と睡蓮をたしなめる。

はやての隣で控えていたシグナム「我関せずの表情+睡蓮への若干の怒の感情。

「基本的に二人には、ライティング分隊のメンバーというよりは、スターズ分隊の新人二人と、フォワード部隊として動くことの方が多いから、そのつもりで。スターズの新人二人は一週間前に既に隊舎入りしてるから、たぶん今頃の時間だと、なのは隊長にしがこれてる頃やろ。訓練施設に行けば会えるから、仲良うしてなあ」

睡蓮は、他にも二人の異動メンバーがいることにぴくりと反応する。

「言つとくが、オレは——」

「睡蓮ちゃん!!」

フローラが睡蓮の言葉を遮ろうとするが、ふんと鼻を鳴らして睡蓮がひと睨みすると、ひっと小さな悲鳴を上げて黙ってしまった。

「オレはな、隊長さん。他に何人いようが、好きにやるぜ。よく覚えておけ」

フェイトⅡ驚き顔。

シグナムⅡ険しい表情。

フローラⅡ涙目。

そして、はやては「あちゃー」と頭痛を堪えるようにこめかみを押さえた。

なんとも前途多難。睡蓮を除いた、そこにいた全員の思考が一致する。

そんな空気の隊長室の中心で、睡蓮はタバコに火をつけて、深々と吸った。

「あ、あの睡蓮」

部隊長室を出た睡蓮・フローラ・フェイト。その直後、フェイトはおずおずと睡蓮に話しかけた。

未だにタバコをくわえる睡蓮は、短くなつたタバコを携帯灰皿にぶち込み／睨み／溜め息。

「なんすか？」

冷房が効いてひんやりとした隊舎内。それだけでない寒気がフェイトを襲う。

——この眼を、私は知っている。

「どうして、隊長室であんなことを言ったの？」

隊長らしからぬ弱気な態度でフェイトは問う。それに睡蓮は、寧ろな笑みを浮かべて言いきった。

「フローラの弾丸以外に、オレの突撃【シュトゥルム】について来れないからっすよ、たいちよー」

——そうだ、この眼は、シュガーに似ているんだ。

それほど接触があったわけではない。けれど、一度見たら忘れられない眼。

「だから、オレは勝手にやる。こいつのフォロー【狙撃】があれば、それで充分だ」

——この眼は、何度も自分の命を危険にさらしてきた人の眼だ。

訓練施設に到着した睡蓮とフローラの二人を迎えたのは、高町なのはとヴィータ。そして二人の少女だった。

一人は黒髪黒目。病的ではない、美しい白い肌の少女。さらりと風流に流れる、ポニーテールと、冷たい鉄を連想させる切れ長な眼が印象的。

もう一人は薄い緑色の髪と、青い瞳を持つ少女。少し跳ねたショートカットからアンテナのように伸びる髪の毛が、少女の感情に合わせて、ぴこぴここと反応している。

睡蓮「相変わらずの仏頂面。

フローラ「につこりと笑顔／先ほどの睡蓮の言葉にご満悦。

フェイト「苦笑い。

ほら、まずは挨拶して二人とも、このフェイト隊長のお達しで、睡蓮は面倒そうに。フローラはキリツと敬礼した。

「……睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー二等特甲士。よろしくな
くていい」

「同じく、フローラ・ベヘレン二等特甲士です。よろしくお願い致します！」

対照的な二人に苦笑いのフェイト。今日は苦笑いが絶えない日だとしてとめのないことを考える。

対照的な二人に対し、黒髪の少女と緑色の髪の少女もそれぞれ対照的な自己紹介をする。

「機動六課スターズ分隊所属、黒崎綾乃二等陸士です。よろしく」

「綾乃ちゃんとおなじく、機動六課スターズ分隊所属、エルマ・ラヴェスです。階級は、えゝ……と——」

「私と同じ二等陸士だろう、エルマ」

自分の階級を本当に忘れていたらしいエルマに、やれやれと綾乃が念話を送る。

「あ、そうだった。ごめんねー、綾乃ちゃん！！ わたしも綾乃ちゃんとおそろいの二等陸士ですっ！」

元氣良く己の失態を宣言するエルマ。綾乃は溜め息をつきながら、左手に持っていた日本刀型デバイスの鞘で、エルマの頭をぽくんと叩く。

「痛いよー綾乃ちゃん」

するとみるみる涙目になるエルマ。睡蓮は誰かに似ているなと隣を横目で見える。

視線の先には、涙目で頭を抑え、エルマに感情移入しまくっているフローラの姿があった。

微妙な雰囲気の中、なのはとヴィータの号令で、訓練がスタートした。

「はあー」
「ふうー」

（う、やりにくいよー）

最も、当の訓練生たちはかなりテンションが低いが。なのははそんな二人を見比べてオロオロと落ち着かない態度だ。今までの訓練生とのあまりの毛並みの違いに、戸惑いを隠せない。

（やれやれ、エルマには困ったものだ）

（バカばかりだぜ）

なのはを無視して溜め息をつく綾乃と睡蓮。

首を傾げるエルマ／フローラ。

「お前ら、教導は始まってんだ。集中しろ」

その状況を見かねたヴィータが喝を入れた。すみません、と謝る綾乃と、無言でヴィータを睨む睡蓮。

「睡蓮、何か文句あんのかよ？　　あるなら、睨んでないでハッキリ言え」

「睨んでないっすよ、副隊長。生まれつき目つきは悪いんっす」

まさに一触即発である。気の長い方ではない鉄槌の騎士と、不真面目極まりない不良局員。まさに水と油の関係に例えてもよい二人は、互いに睨み合う。

「ちょ、ちよつと落ち着いて二人とも！」

慌てて二人を止めるフェイト。胃がキリリと悲鳴を上げたような気がして、最近胃薬を手放せない義兄の顔が一瞬浮かんだ。どうも家庭と仕事に板挟みにされているらしい。義理とは言え、兄妹は似るのだなとフェイト思う。

もちろんのこと、一連の思考は現実逃避のためのものである。主に、オロオロとした雰囲気が一気に変化した背後の親友からの。

「そうだよ、二人とも。ちよつとお話ししようか？」

魔王降臨。その場にいた誰もが思った。睨み合う二人は同時になのはを見て冷や汗を垂らし、他の全員もあまりの緊張感にゴクリと生唾を飲み込む。

「チームの基本は、仲良く、だよな？」

——十秒後、桜色の柱が夏の空に伸びていった。

後に睡蓮とヴィータは語る。自分達二人は最悪の相性であるが、命の危険を感じた時、不思議と手を取り合えた。

05 / sham battle

睡蓮とヴィータが桜色に飲み込まれた日の翌日。新フォワードメンバーの睡蓮・フローラ・綾乃・エルマの四人は、訓練施設に集合していた。

先日の桜色のナニかによって中止になった、模擬戦闘を行うためである。

形式は、高町なのはとヴィータの二人と、新フォワードメンバー四人の二対四。

既にメンバー達のやる気は十分で、気迫に溢れた瞳で開始時刻を待つ。

フォワードメンバーは、なのは達から離れたスタート地点にて、作戦会議を開いていた。

「指揮をとるのは私で良いな？ 君達よりも一週間だけとはいえ、私達はなのは隊長の教導を受けている」

会議の中心は綾乃。切れ長の黒い瞳でメンバーを見渡し、はっきりと告げる。事実、このメンバーの中で最も冷静な判断と、戦略を組み立てる能力の高い綾乃が適任と言えるだろう。綾乃はそれを理解していた。

エルマは言わずもがな。新しく来た睡蓮とフローラの戦闘能力については映像資料で互いに見ているため、睡蓮達が策を弄する者では

ないことは分かっている。

睡蓮は「へいへい」と態度は悪いものの、反論はせず。フローラはそんな睡蓮を見て疑問を持つものの、「良いですよ」と朗らかに答える。

「よし。では作戦は――」

もちろん、睡蓮には綾乃の作戦に従う気などない。今の睡蓮の頭は、気に入らない上司を殴り倒すことで一杯だ。無論、それは簡単にできることではないのだが、綾乃の作戦――ヴィータは撃破よりも足止めすることを優先し、動きの早い綾乃がなのはに接近戦を挑む――をうまく利用すれば不可能ではない。フローラは前線では足手まといだが、狙撃手としては天才と言える才能がある。第二世代特甲局員であるため、制限時間が三十分であることは痛い、それは自分も同じこと。綾乃が提案する作戦では制限時間ギリギリになる。特甲は外付けの魔力バッテリー。故に、それが尽きれば自分の戦力は大幅に落ちてしまう。

――故に、睡蓮はいつでも短期決戦を狙う。制限時間を迎えてなぶり殺しにされるより、玉砕を選ぶ。それが、睡蓮・ナユタ・シユレイリンガーという人間だ。

だから、ヴィータを足止めするふりしてエルマになすりつけ、綾乃に注意を引かれたなのはに鉄拳を食らわせる。その一撃で倒せないにしても、陣形を乱すことは可能だ。敵も味方も。あとはフローラのフォロー【狙撃】があれば、一旦離脱して奇襲をかけることができる。ここまで来るのに綾乃とエルマが邪魔ならば、倒せば良い。

睡蓮はそう結論を出し、模擬戦闘開始の時間を待った。

睡蓮の作戦は実に穴だらけ。しかし、特甲装備者の基本戦術だ。制限時間を過ぎれば戦力は大幅に落ちてしまふ。だからこそ玉砕戦法。人間爆弾。特甲装備者製造に置ける基本思想だ。

睡蓮という少女は、それに悲しいほどに合致した少女なのだ。

戦闘スタートの合図とともに、フローラ以外の三人は、身を隠しながらヴィータとなのはに接近して行く。

対するヴィータとなのはは、身を隠すこともせず、油断無く迎撃体制を取る。

睡蓮とフローラはスタートと同時に特甲を装備。睡蓮／魔力雷撃機。フローラ／基本的な魔導師の杖では無く、ビルの屋上にて長大なライフルを展開。完璧な三点姿勢でサイトを覗く。

綾乃とエルマ「開始時刻より少し前にデバイスを機動。綾乃／日本刀と言うより、所謂長ドス型。エルマ／基本的な魔導師の杖。ただし、接近にも対応した、フェイトのものに近い形状。綾乃とエルマは、なのはの砲撃の的にならないよう、ジグザグに動きながら接近して行くのに対し、睡蓮は小細工なしで直進する。」

《ばっ、馬鹿——》

綾乃が念話を送る暇も無く、なのはの杖に桜色の魔力が集中していく。しかし、睡蓮はそんなものは知らないとはかりにヴィータに接近。

ヴィータは迎撃する必要も無いと判断し、後続の綾乃とエルマを警戒するが——

「よそ見てんじゃねえよ、ロリ野郎」

背後から現れた睡蓮の拳がヴィータの顔面に迫る。

「ちっ！」

ヴィータは完全に予想外の攻撃を緊急回避。おまけと言わんばかりに迫る、黄色の魔弾も己の得物、グラーファイゼンで叩き落とす。

——フローラによる長距離狙撃。それは、寸分の狂いもなくなのはのデバイスに音速で迫り、砲撃魔法の完成を阻害した。無論、

なのはの圧倒的防御力を貫くほどではないにせよ、『防御行動』を取らせるには十分なものだ。

なのはとヴィータは弾丸の角度から、狙撃手を探そうとするが、何も見えない。二人は、なるほどと納得し、同時に特甲局員の可能性に興味を持った。許されないはずの技術によって産み出された、悲しい存在。今でこそ合法とされているが、狂気の犠牲とも言える存在。その、可能性を。

しかし――

睡蓮は、綾乃の《勝手な行動をするな！》との念話をあつさり無視。ヴィータに追撃をかける。

――管理局員としては、あまりに未熟。

数々のテロリストを打ち碎いてきた睡蓮の拳。雷撃値は50%。必殺の威力のそれは、けれどもヴィータのシールドによって止められ、なのはの誘導弾が睡蓮を襲う。複雑な軌道で睡蓮に迫るそれは、フローラの的確な狙撃をもつてしても、その全てを撃ち落とすことはかなわない。あわや直撃と思われた瞬間――

「緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 何者かによって時空管理局地上本部が占拠された。各武装隊は、直ちにこれを鎮圧せよ。繰

り返す……—」

けたたましいアラート音が、それを遮った。

「……………また、戦いが始まってしまっの？」

巨大なモニターのある、とある部隊の指令室。長く美しい空色の髪の女性、マキナは、映し出される時空管理局地上本部を眺め、呟いた。

「そのようだ」

隣に佇むシュガーは、無感動に首肯する。けれど、無感動なその瞳の奥に、ほんの僅な諦念が映った。

また。まただ。シュガーは殺さなくてはならない。それが仕事だから。それが存在理由だから。

「僕は、行くよ。行かなきゃマキナを守れない」

そうしなければ、愛する者を守れないから。例え、それが終わらないものとしても、シュガーは行かなければならない。

シュガーは、未だモニターに目を向けるマキナの横から静かに立ち去る。

マキナは、そんなシュガーを黙って見送るしか無かった。

マキナの指に嵌められた、藍色の宝石が、彼女の心の涙のように、キラリと光った。

「やはり、インターセプターでは僕達を阻止出来なかったみたいだね」

「当たり前だ。元より、我々とは戦力に差がありすぎるのだ」

「まあ、こちらには私たち、四剣聖と史上最強の騎士サマがいるんだから当然かなー。まあ、頑張ったほうじゃない？ ああ、シュガーってコとか」

「確かに。スゲー強かった。是非ともまた戦いてーぜ」

「何はともあれ、これから、我々の歴史が始まるワケだ。盛大に祝おうじゃないか。我々の行動は、新たな歴史を作る。これは決定事項だ」

「――では、始めよう。新しい時代の幕開けだ」

06 / dark storm (b)

漆黒の風が炎天下のミッドチルダを駆け抜けて行く。

その風は、触れたモノを殺害していく、死神の鎌。黒い風の中で微かにに光る赤紫が、風の通り道に首なし死体を作り上げていった。

それはまさに三年前の再現。たった一人の死神 殺人鬼による虐殺。

「こちらアメジスト。ガンナー、そちらの状況を報告せよ」

黒い嵐たるシュガーは、ひたすらに赤紫の短刀を振るいながら、インカムで通信を取る。通信の向こう。ガンナーと呼ばれた者は、女性のようなうだ。

《こちらガンナー。こっちはあたしだけでなんとかなりそう。けど、ちょっと、数が、多い、わねっ！！》

通信の向こうで爆発音。どうやら、ガンナーと呼ばれた女性が、管理局地上本部正面を突破したようだ。

シュガー「人は変われば変わるモノだと感心。

三年前は典型的な管理局員で、執務官を目指していた者が、『こちら側』に来ている。

《……………！ シュガー！ 地上本部には――

――！》

「どうした？ 作戦中はコードネームで呼べ、ガンナー」

「誰も、いないだろう？」

突如として目の前に男が転移した。逆立った燃え上がるような赤毛の髪／肩に担がれた三メートルはあるうかという巨大な斬馬刀。聖王教会四剣聖の一人。「陽炎」のジャン・炎射・シャル。

「ガンナー。ティアナ・ランスターの方には、他の四剣聖が行つてるぜい。もうガンナーは逝つてるかもなー。がっはっはっは。今のオモシレー。メモしとこ」

シュガーは、ふざけた態度をとる大男を見据え、油断無く構える。そして、舌打ちを一つして慣れた動作でショートホープを口にくわえ、着火。ぎらぎらと輝く太陽に、ふうと吹き掛ける。

「やれやれ、起きろアメジスト」

《―――》 起動 《―――》

瞬間、シュガーの左手に握られていた短刀が、質量保存の法則を無視して変形していく。暗黒色からやがて現れたのは、まるでアイスキャンディーのようなもの。かつて、オルタ・レイ・マデューカスを使用したものと同型のチェーンソー。

アイスキャンディーのような刀身の側面には鯊の牙のような魔力刃がびっしりと並び、シュガーがカードリッジを一発ロードすると、どるん、と低い唸り声を上げて、きゅいーんという耳障りな音をたてて回転を始めた。

《装填》

「時間が無い。コレが罠だというなら、既にこの任務に意味は無い。ティアナを拾ってさっさと帰らせてもらう」

シュガーは確かめるようにひと振り。それは、かつてのオルタ軽く凌駕する神速の一撃。

対するジャンは、面白いモノを見つけた子供のように目を輝かせる。

「そいつは前回ぶっ壊した青いナイフしかナイフの代わりにかい？
ソレ、かなりヤバイヤツだろ。オモシレくなってキタぜい！」
そして、苛烈過ぎる闘志をもって、殺人鬼と陽炎の【戦闘】が始ま

った。

僕には、この生き方しかできない、とかつて少年は語った。青年となつた今も、殺人を続けている。

「ひやはは、いいねイイねイイネエエエ！」

敵ならば殺す。それが仕事だから。青年は、【彼女】の騎士だから。

「おらあー。下がから空きでシタ！」

敵。陽炎。必殺の一撃は必殺たりえず、暗黒の嵐は肉を切り裂くことも骨を砕くこともせず、ゆらりと消える真夏の陽炎ばかりを捉え

る。

シュガーはジャンの幻を切り払いながら、自分の危機察知本能だけを頼りに、【ジャン】の一撃を防御ないし回避していく。

「息が上がってるぜい」

「それがかつて、機会仕掛けの神をブッコロしたヤツのちからかい？」

「剣を蹴らないでよーっ（笑）」

見渡す限りの幻影／幻影／幻影。ゆらめく陽炎／陽炎／陽炎。周りを取り囲んでいたクーデター軍の奴らもジャンになっているものもあるため、幻を全て無視する訳にもいかない。

すり抜ける幻影と、攻撃力のある本物があるためだ。かつて、その身にロストロギアを宿らせていた（宿らされていた）シュガーと、良く似た戦闘方法／ただし、襲い来る刃はあまりにも暴力的。

このままじゃ拉致があかない。シュガーの苛立ち。アメジストの殺傷能力の高さは非常に高いが、当たらなければ意味が無い。

よって――

《Link…… and burst》

シュガーは、【右腕】を叩き起こす。特甲義肢化された右腕を。そして、その人外の力を持つ右腕にアメジストを持ち替え、舗装された地面を叩き割った。

ティアナは一人の少女と対峙していた。相手は【聖王教会】四剣聖の一人、「百花」^{アジサイ}紫陽花・ウォーターフィールドノ紫色の長い髪をツインテールにした、十四歳ほどのゴシッククロリータ服を来た少女。無人の管理局地上本部にて待ち構えていた者。

「このクーデターは、聖王教会が引き起こしたもの？ それにしては何の声明も無いし、あんた達の兵は、管理局の応援に駆けつけた聖王教会騎士まで殺しているようだけど？」

ティアナの質問に、紫陽花は、つまんない」と頬を膨らませる。

「そんなつまんない話しをするよりも、ボクと遊ぼうよ！」

くると手で弄び、正眼にびしっと構えられたレイピア。紫陽花の手を守るように、花びらが寄せ集められたようなデザインのナックルガードのようなものが「生えて」くる。

ティアナ「ソレが己の命を脅かす可能性があるものだ」と瞬時に判断。油断無くクロスミラージユの後継機、ファントムミラージユを構える。

「準備はオッケーだねっ じゃあ、……………遊ぼうか!!」

その刹那、レイピアが爆散した。無数に、無尽蔵に死が生い茂る。

それは、獰猛な蛇のようにうねり、猛り、認識不可能な軌道をもつてティアナに殺到する。

その蛇のようにうねる【枝】の先端には、銀色の【花】があり、鋭利な形状なソレは、明らかな殺人の意思が込められている。「百花」の名に偽りは無い。

ティアナは、それらの花を、自分の急所を正確に狙うものを左手の銃形態のファントムミラージユで撃ち落としながら、それ以外のものを右手のダガー形態のファントムミラージユで切り払う。

「くっ……………！」

苦虫を噛み潰したような表情を見せるティアナ。あまりにも苛烈な暴力的「生長」を前に、防衛を行うだけで精一杯であるのだ。

更に、無邪気に笑う紫陽花には、まだまだ余力があるようで、枝と花はまだまだ増えるようである。

「枯れ木に花を咲かせましょー」

全く、可憐とも言える無邪気な笑みが憎たらしい。ひたすらに手を動かすティアナ。まるで、密林で庭師の真似事をしているようだ。

いつしか両の手はどちらもダガー形態となっている。連射可能な魔力弾では、生い茂る花の壁を突破することは不可能だと判断したからだ。

もはやジリ貧。ティアナの敗北は時間の問題である。

「頑張るねー、庭師さん　　じゃあ、もうちょっとたくさん花をさかせてみようっつー」

万事休す。暗黒の嵐が現れたのは、まさにその瞬間だった。

突如として紫陽花の側面に転移した青年は、生い茂る密林の根本を、その手に持ったチェーンソーで伐採した。

根から切断された枝は、殺意を失い、ぱしゃんと液体化して紫陽花の手元へと戻っていった。

「森林伐採反対だよ」

紫陽花Ⅱ突然の乱入者に、奈落のような光の無い目玉をぎろりと向けた。

乱入者Ⅱシュガーはそれを無視して、ティアナの方を向く。

「地上本部がガラ空きである以上、これ以上の戦闘は無意味だ。防衛対象も奪還対象も皆殺しのようだからな。帰投するぞ、ガンナー」

「了解。ナイスタイミング！ 助かったわ」

会話しながら、合流して転移術式を紡ぐ二人。だらんと両手を垂らした紫陽花は、ゆっくりとレイピアをシュガー達に向け、

「私を、無視するな！」

一気に殺意を放出した。

「じゃあね、ガキ」

しかしながら、それらが貫いたのはティアナの残した言葉だけであり、串刺しになった死体は存在しなかった。

「逃げられたのかい？ 紫陽花？」

シュガーとティアナが去った地上本部前。その場で立ち尽くす紫陽花の後ろから、ジャンがぼんやりと現れた。

「ジャン？ 貴方の寒い駄洒落を聞きたい気分ではないのだけかどうか？」

紫陽花は先ほどとは違う口調・態度で、ジャンを拒絶する。

「まあ、そう言っちなや紫陽花。奴ら、地上本部が死体しかないことに気づいた瞬間、さっさと引き上げやがった。俺様たちの狙いが地上本部の占拠じゃねえことに気がついたみてえだなア」

感心したように話す大男、ジャン。紫陽花は諦めたように溜め息を一つ。「それで、その傷は？」と、明らかに感心は無いが、拒絶の意思を消してジャンを横目で見る。

「ああ、これかい？ シュガーが俺様の戦闘から離脱する時に地面を叩き割りやがってなあ。道路の破片でちよいと切っちゃったワケよ。おれの骨はおれませんでしたか………ひゃ、ひゃ、ひゃはははは！ 俺様サイコー！！ これも後でメモしとこ！」

馬鹿笑いするジャンをしり目に、紫陽花はもう一度溜め息をつく。

どうやら、腑抜けた管理局よりも、インターセプターの方がなかなか厄介な存在であると。

「ま、ボクは強いから、もーまんたいだけどねー」

それは、動き出した戦いの歯車が、正義と正義を激突させ始めた瞬間だった。

07 / dark storm (a)

うるせー、と独り言を言いながら、睡蓮はミッドチルダを駆け抜けていた。

ずきゅーん／まぬけな魔力弾の音。

ばきゅーん／クソツタレな銃弾の音。

駆け抜け、殴る／殴る／殴る。

管理局の制服の男・女を殴りまくる。

雷撃値は40％に設定〓睡蓮の苛立ちの現れ。

黄色の魔力弾が睡蓮の突撃をカバー。綾乃とエルマが遊撃的にフォロー。

指揮／指示は一切ないが、荒削りながらも素晴らしいチームプレーで地上本部を目指していく。

なのは達隊長陣は空を担当。時折、極太の魔力砲撃が空を区切る。

「くそ、なんて敵の数だ！」

「こっちの疲れちゃうよー」

綾乃が悪態をつき、エルマが愚痴を漏らす、状況は変わらず。

睡蓮も口には出さないが、拳はいつも以上に荒々しく、一切の手加減がなされていなかった。

「——な……………！」

唐突に発せられた声。それは誰の声だったのだろうか。きっと、誰もが発したのだろう。突如として吹いた黒き風が、大量の人間の首を浚っていったのである。

ごろん、と転がる生首。残された体は力を失い、壊れた蛇口のように馬鹿みたいに血を噴き出して倒れる。

「なんなんだよ、これは……………！」

まるでそれは、三年前の出来事。明確な死の香り。
美しく、最低な命の華。

それは、死。黒き風は死神。いや、殺人鬼だ。

ふざけるな。苛烈な憤怒。三年前の再現【フラッシュバック】。

「ふうざ、けんなあああああああー！」

視界が真っ赤に染まる。

雷撃値、最大。ミシミシと嫌な音がするが無視。脳内に大音量で鳴る警告音も、急激に早まる限界時間カウンントも全て無視。

睡蓮は全てを忘れ、憤怒にその身を委ね――

――暗黒の風に、機械の腕を突っ込み、浚われた。

睡蓮・ナユタ・シュレイリンガーの、明確な初めての敗北であり、始めて戦場で意識を失った瞬間だった。

「あー……………」

睡蓮が目を覚ますと、真つ白な天井と、ぐちゃぐちゃに泣きまぐつたであろうフローラの顔、心配そうに覗き込むエルマの顔、ドアの付近で壁に寄りかかる綾乃が見えた。

気分は最低。当然だ。完膚なく敗北の味だ。

「あー、タバコ吸いてー」

ばかん〓間の抜けた睡蓮の発言に対する返答／フローラが睡蓮の頭を叩く音。

「てめ、何しやが——」

睡蓮は言いかけて、やめた。枯れたはずの瞳から、再び涙を流すフ

ローラ。

睡蓮には、それがどうしようもなく温かいものに思えて、胸にぎゅっとしめつけるような感覚を覚えた。

フローラは何も言わない。綾乃も、エルマも、黙っているばかり。沈黙の病室には、フローラのすすり泣く声だけが、やけに大きく響いた。

「あー、なんつか、ごめん」

やつとの思いで紡いだ睡蓮の言葉。そして不意に汗の匂いと柔らかい感触。

フローラが睡蓮を抱き締めたのだ。

「死んじゃ、やだ、よ。睡蓮ちゃん」

「ああ、死なねーよ。まだ、オレは死なねー」

いつの間にかに綾乃とエルマの姿は病室から消えていて、白い病室に、二人の少女だけが、抱き締めあっていた。

「この、クソツタレな世界で生きて、生きて、生きまくってやるよ」

睡蓮の決意。そして、明確な拳を振るう先ができた。黒き風を潰す。睡蓮の直感が、アレこそが自分をこの惨めでクソツタレな人生の原因だと告げるのだ。

ソイツを殴るまで。ソイツを殺すまで――

「オレは、生きるんだ」

睡蓮の決意はフローラには伝わらない。けれど、言葉にならない憎悪と憤怒だけは、確かに伝わっていた。

「言わなくて、良かったの？」

睡蓮の病室の前。エルマと綾乃の冴えない顔。

「今は駄目だ。このことは、少なくとも睡蓮の特甲の修理が終わってからだ」

睡蓮の【彼】を見たときの反応。それだけで、【この】事実を伏せておくには充分過ぎた。

「よりによつて……………」

綾乃の見つめる先。機動六課に対する協力依頼書。

協力を申請した組織の名前は、インターセプター。署名は、インターセプター総責任者ジェーン・スミス。

そして――

—— インターセプター 第0小隊隊長。通称、黒き風。シュ
ガー・レイ・マデューカス。

08 / She is (not) fool

睡蓮は苛ついていた。特甲局員専用の病院、通称『ファクトリー』に収容されて二日。

『換装』された両手の脆弱さ／両足は【代用品】すらない、たまに見舞いに来ながらも、自分に何の事後状況も知らせない上司・同僚。睡蓮「苛つく／苛つく／苛つくが、しかし、苛立ちを発散するモノ、発散できる手足ともに修理中。」

特殊魔導機械装甲義肢、特甲は、謂わば外付けのリンカーコアのようなもの。カードリッジシステムのように予め魔力を装填し、純粋な魔力衝撃に変換して放出する。さらに、失った四肢を補い、機械の力で失われた四肢以上の出力を出すことを可能とするものだ。『外付け』であることから、当然ながらユニゾンデバイスの融合事故のようなことも起こり得る。しかも、もともとは肉体に無いものを無理矢理付けるのだから、特甲の暴走事故のリスクは非常に高い。

最悪、装填された魔力が暴発し、生身の部分ごと、接続部・特甲が吹き飛ぶ。

故に、特甲の整備は慎重に。尚且つ莫大なコストを掛けて行わなければならない。

ミッドチルダは魔法至上主義。戦争のための鉄砲の玉は、確実に敵

を減らさなければならぬのだから。

睡蓮もそのことは承知である。第二世代の特甲よりは単純な機構であるが、第二世代の特甲よりも精密な検査が必要であることくらいは。

第二世代特甲を魔導師たちの補充兵や予備兵とするならば、第一世代特甲は拳銃だ。自分の身を守るための拳銃が必要な時に使えなければ、何の意味もない荷物になってしまう。

「——はっ！」

だから、睡蓮は笑うのだ。苛立ちと、退屈と、侮蔑と、煮えたぎる憤怒を込めて。

——機動六課に寄せられた、依頼書の写しを握りつぶしながら。

機動六課総司令部ロングアーチに、三人の男女が訪れていた。

一人は妙齡の女性。燃えるような赤い長髪と、くわえタバコが特徴的である。

その後ろに控えるのは、短い黒髪で無駄の無い体型をした青年と、オレンジ色の髪を二つに縛った女性。

それぞれ、ジェーン・スミス、シュガー・レイ・マデューカス、ティアナ・ランスターである。

その三人と対峙するように、八神はやたとグリフィス・ロウランは立っていた。

「で、この書類の真意を教えてくださいませんか？　それと、どうしてティアナがそこにいるのかを」

ジェーンの目の前で、件の依頼書をヒラヒラとさせる、はやて。

ジェーンは挑発的なはやての態度に内心苛つきながらも、表情には出さず、むしろにこやかに答えた。

「先日の管理局地上本部襲撃は、過程・結果ともに【普通】ではありえせんわ。わたしくし達の組織、インターセプターは、もとを正せば管理局員。管理局の危機に、他の組織——特に、機動六課のような優秀かつ、この【クーデター】に荷担していない組織に協力を依頼し、平和と正義を取り戻そうと尽力するのは当然ですわ。ティアナちゃんのことについては、隠された【真実】を知り、わたし達の思想に同調した、ということだけお話ししましょう。詳しくは、ティアナちゃん本人から聞いてくださいね」

スラスラと嘘を偽りの姿で話すジェーンを見て、シュガーとティアナは軽く寒気を覚えた。無論、表には出さないが、これがグータラ隊長の真の姿か、と感心する。

「ちょ、ちょいと待ちいな！　　今、【クーデター】って——
！」

ジェーンはにこやかな表情は全く崩さない。声を荒立てるはやてと、驚愕するグリフィスを、表面上は友好的な視線を配りながら、穏やかに語り始める。

「ええ。これはクーデターです。わたくし達の調査によれば、先日
の事件に現れた『敵』は全て管理局員と聖王教会の制服を着ていま
した。もちろん、カモフラージュの可能性を踏まえて、ID照合も
行いましたわ。そして、それを指揮していたのは、聖王教会と管理
局を併せ、最高の達人とされる者たち。通称、四剣聖。これらを総
括すると、これは管理局と言う名の王政に対するクーデターである
と言えますわ。現に——あら、丁度今日だったようですね」

ジェーンが一時言葉を切る。いや、切らされた。ロングアーチのメ
インモニター。強制全回線放送にてあらゆる電波がジャックされ、
一人の女性の顔が映る。

先日の地上本部襲撃は本命から目を遠ざけるためのデコイ。本命は、
ミッドチルダの中央から少し離れた場所に位置する、情報通信セン
ター。無限書庫と並ぶ、膨大な情報を扱う場所である。地上本部に
いた人間は、デコイの目的のためだけに皆殺しにされたのだ。

インターセプターの三人を除いた、そこにいた全員がそう理解し、
戦慄した。何故ならば、それを行なった人物——たった一人で
地上本部ほどではないとは言え、強固な警備網が張り巡らされる情
報通信センターを掌握した人物——が、まさにモニターに映し
出されているからだ。

「あーあー。音声は大丈夫なようだね。ミッドチルダの皆さん、こんにちは、初めまして、お久しぶり」

流れるような美しい金髪に、ルビーをそのまま嵌め込んだかのような、光に満ちながらも屈折した闇を持つ瞳。

「単刀直入に言いましょうか。私は、元時空管理局二等空佐、ベネディクティン・アレクレーン。今ここに、時空管理局へのクーデター及び、新しき秩序を創る組織、時空監視局の設立を宣言します！」

今世紀最強とされる者がそこにいた。

ロングアーチにいた誰もが口を紡ぐ。推定魔導師ランクSSSS+などと、笑い話にもならない真正正銘の最強が、自分たちに宣戦を布告したのである。

「今の時空管理局はあまりにも傲慢で、無力だ。自らの法こそが絶対と信じきり、他次元の民にもそれを押しつける。ミッドチルダに住まう魔導師たちには戦いを強要し、数多の幼い少年少女が犠牲となってきた！ そんなこと、断じて許して良いワケがない！ 故に、私はここに宣言しよう。犠牲のない世界。皆が笑って暮らせる世界を創ると！！ 契約しよう！！ 我々時空監視局がそれを成すと！！ さあ、ここに、時空管理局という最後の犠牲をもって、新たな世界を紡ごうではないか！！！！」

その言葉を最後に、ベネディクティンは一礼すると、放送は終了した。誰もが口を紡ぐ中、ジェーンはロングアーチ全体に響くような良く通る声を出す。

「時空管理局諸君！　彼ら時空監視局を名乗る者共は、諸君らの血と汗によって得られた平和を蔑ろにし、踏みじろうとしているのだ。何を黙っている！？　今こそ、奮起する時だ！　管理局には闇があるのも事実。しかし、平和を造り続けていたのもまた事実だ。ならば自分たちの仕事に誇りを持て！　我々、インターセプターも及ばずながらも助力しよう！！　今までそうしてきたように、平和を造り上げて見せる！！！」

諸君らに言いたいことはそれだけだ、と付け加え、ジェーンは踵を返す。

シュガーが、良い返事を期待しています、とはやてに耳打ちして、ティアナとともにジェーンに従った。

ジェーンたちは、背後で雄叫びのような奮起の聲が上がるのを聞いて口角を吊り上げつつ、その場を後にした。

戦いが始まる。白き少年は、誰もいない情報通信センターの屋上で、フルートを吹く。壊れた人間だらけの屋上で、フルートを吹く。積み上げられた死体の悪臭に顔を歪めることもせず、無心でフルートを吹く。

ちらちらと、真夏の空に、粉雪が舞った。

時空監視局の宣戦布告からさらに二日後。当然ながらそれを聞いた睡蓮は、すぐさま退院を申請するが受理されず、特甲の修理は終わったものの、検査のためにファクトリーから出ることは出来なかった。

検査、といっても身体検査の類いでは無く、特甲の起動検査であるため、思う存分にサンドバッグを殴れる。

そのため、睡蓮は苛立ちをぶつける対象に困らなかった。

けれど、焦りは拭えない。あの黒き風。最悪の殺人鬼には遠く及ばない。

あまりの速度の違いに、睡蓮には紫の閃光と、泥のような濁った僅かな眼光のみをなんとか視界におさめられただけで、敵とすら思われず、単に邪魔な小石を蹴飛ばしたようだった。

（小石？ このオレが？）

沸き上がる憤怒。沈み行く思考の罅。

ぎりり、と歯ぎしりを一つして、激情と焦燥のままに拳を振るう。

—— 勝てない。

はじめて睡蓮は心からそう思った。なのはや、フェイトには無い、本物の死の気配を纏った男に、恐怖した。

—— バカな。

恐怖などあり得るものか。もとより、そんなものは睡蓮・ナユタ・シュレイリンガーには存在しないはずだ。有るのは、憤怒。在るのは冷たい鉄拳。

だから、ひたすらに拳を振るうのだ。

睡蓮はそう自分に言い聞かせるように、さらに拳を振るう。装填された魔力が、睡蓮の憤怒を現すかのように赤く迸る。

雷撃値、約100%。レベル1A型装備とされる、睡蓮の特甲では破壊出来ないはずの、訓練用サンドバッグが、派手な音をたてて吹き飛んだ。

特甲局員は、大きく分けて三つのタイプが存在する。

一つ目は、睡蓮のような第一世代特甲局員。魔法を扱う素質の無い者に、外付けの機械四肢を与え、魔導師に匹敵する戦闘力を与えられた者。常に低濃度のAMFを纏っているため、彼らの使う“魔力”は、術式を伴わない、純粹な魔力衝撃となっている。そのため、彼らの全ては地上近接戦闘を行う。

二つ目は、フローラのような、第二世代特甲局員。第一世代特甲局員との大きな違いは、“魔法”を扱う点である。リンカーコアが無くとも、脳で術式を組む【脳力】を持つ者がこれにあたり、特甲に装填された魔力が尽きるまで、魔導師としての戦闘を行うことができる。

そして、三つ目。第零世代特甲局員。通称、特甲猟兵。特甲局員の最初期型。次元世界の紛争地域に派遣される、超高濃度AMFを纏った、【質量】兵器。桁外れの戦闘能力をほこり、特甲猟兵一人の戦力は、戦略兵器レベルだと言われている。

樗ノスノウ・ホワイトはその零世代特甲局員にあたる。特甲局員の全ては例外無くファクトリーにて整備が行われる。もちろんのこと、樗も例外ではない。

櫛は特甲の整備のためにファクトリーを訪れていた。ファクトリーは管理局の【監視下にある中立地帯】であり、運営はファクトリー自身で行っている。故に、特甲管理局員である睡蓮と、特甲“監視”局員たる櫛がここで出会う可能性が無いとは限らない。

限に――

訓練施設のカタスミ。少女は、一人の少年の前で足を止めた。

睡蓮は、訓練用サンドバッグを彼方へとすっ飛ばした後で、こりや面倒なことになりそうだと頬を軽くかいて、逃げ出すことにした。かつての隊長のごとくカタブツも、現在の隊長のごとく短気もファ

クトリーにいないことは知っているが、面倒なコトになるといふことは代わり無い。

主に、始末書とか。

そんなワケで、じゃあなーと手を振りながら、その場を離れようとして、笛の音が聞こえることに睡蓮は気付く。

はて、と首を捻りながら音が聞こえる方へと行ってみると、自分と同じような白髪頭が、銀色のフルートを吹いていた。

音楽どころか、あらゆる芸術に興味を持たなかった睡蓮であるが、何故か心惹かれるものを感じた。

音色の美しさ、などは理解出来ないが、憤怒のような、憎悪のような、悲哀のような、胸を吹き抜ける痛みの風だけは理解できる。睡蓮はそんな気がした。

だから、

「おい、お前」

ほんの気まぐれ。その少年に声をかけた。

少年はフルートを静かに演奏を終了すると、閉じていた両の目をゆつくりと開けて、睡蓮を見据える。

瞬間、睡蓮は息を飲んだ。

その瞳の色は赤。自分のような赤銅色ではなく、ましてや美しいピジョンレッドなどでは決してなく、人間の血を煮詰めて固めたような、怨念の赤。十字架の刺青が、さらにそれを引き立てる。

「なに？」

睡蓮の視線を気にする風でもなく、少年は淡々とした口調で答えた。僅かに首を傾げたそのしぐさは、少年の身長が睡蓮と同じ程度しかないこともあって、年齢以上に幼く見える。

睡蓮は、少しバツが悪そうに目だけは少年を捉えて、顔を背ける。

「べ、別に何でもねーけどよ。ただ、キレイな音だと思ってよ……」

だんだんとしぼんでいく口調。あーあ、興味本意で来るんじゃないかな。と胸中で溜め息。

けれど、少年にはそれが伝わらなかったようで、

「ありがとう」

と柔らかに微笑んだ。

何だこいつ？ 純粹過ぎるだろっ！ アホかつ！ と、内心で毒づく睡蓮であるが、既に顔は完全に背けられており、顔は耳まで真っ赤になっている。

どうしちゃったんだオレは！ と絶賛大混乱中。

「じゃ、じゃあな！ そんだけだ！」

と、ゆでダコを通り越して、熱した鉄板のように真っ赤な顔を隠すように足早に立ち去っていった。

残された少年は、柔らかな笑みを浮かべたままで、再びフルートを口にあてる。

それからしばらく、訓練施設に、穏やかなフルートの音色が響いた。

その場を立ち去った睡蓮が、施設の管理人に捕まり、始末書を書くことになり、新品のサンドバッグを購入させられたのは、また別の話し。

10 / h a t r e d

ファクトリーに睡蓮が入れられて一週間。ようやく施設から出られるという嬉しさ半分。いきなり呼び出されたという苛立ち半分で機動六課へと向かう。

隊舎に向かう道中、睡蓮は車で迎えに来たフェイトから、簡単に情勢の説明を聞く。

まずは、敵・時空監視局の戦力。【最強】ベネディクティンを筆頭に、四剣聖達が秘密裏に集めていた戦力にプラスして、次元世界に散っていた魔導師・騎士達が同調しており、情報通信センターを本部として活動中。戦力としては、まだそれほど多くはないが、ミッドチルダ近隣の次元世界や、テロ組織の支持も集めているため、戦力は現在進行形で増えている。

特に、二代テロ組織「自由の会」と「カタルシス」による支援、或いは合併・癒着は時間の問題である。

一方の時空管理局。監視局に戦力を取られた上、地上本部は壊滅状態であるが、聖王教会とインターセプターの協力により、なんとか監視局との戦力差を埋めている状態である。

また、大量の特甲猟兵の投入によって、一応は有利な状況であるが、特甲猟兵の制限時間を考えると、それも長くはもたない。

さらに、人外能力を【持たされた】特甲猟兵たちは、体よりも先に心が死ぬケースが多いため、監視局との均衡は近い内に破れるだろうとのことだ。

それらを語るフェイトの顔は冴えない。睡蓮の瞳にも怒りが映るが、諦念にすぐ変わった。

特甲は拳銃。それが兵器であり、使い捨てであることは変わらない。思っていたより、少し早かったな、自分が死ぬのは。と、他人事のように睡蓮は考える。

特甲猟兵の投入。それは、睡蓮の特甲レベルの引き上げを意味し、戦時下以上の脅威を意味する。

そして、何より――

「殺し合いが始まったかー」

隊舎に到着した睡蓮を出迎えたのは、フローラ・綾乃・エルマ・なのはの四人だった。

さらにその後ろに、控える、ティアナ・ランスター。そして、シュガー・レイ・マデューカス。

煮えたぎる憤怒の叫びを出来る限り無視し、睡蓮は戻りましたーと、

シュガーを半目で見ながら言う。

抱きついてくるフローラに、口で謝りながらも、その視線はシュガーから離さない。

対するシュガーは、特に気にした様子もなく、無表情・無感動な視線を漠然と送る。

ま、そんなもんだよな、ヤツにとって『睡蓮の率直な感想』。

とりあえず訓練は午後からね、というなのは、の言葉を受けて、睡蓮はフローラとともに自分たちの部屋へと歩を向ける。

そんな睡蓮には、エルマが送る悲しげな視線に気づくことはできなかった。

どーしてこーなった。と、溜め息を吐きながら、睡蓮は目の前の人

物を睨み付ける。

睡蓮の正面「シュガー」。

昼下がりの訓練施設に集合したのは、睡蓮・綾乃・エルマ、そしてシュガー。狙撃を主とするフローラは、好青年そうでチャライニイサン「ヴァイスとともに射撃訓練場へ」。

まさに四面楚歌（睡蓮の勝手な主観）。

睨み付ける睡蓮を、相も変わらず無視しながら、淡々と訓練内容を告げるシュガー。

曰く、模擬戦。

狙撃によるフォローを考えない、近中距離戦闘を主とする三人のチームワークを向上するためのモノである。

先日の戦闘においての四人でのチームワークは、素晴らしいものではあったが、あくまでも『初めてにしては』とつく。緊急事態につき、仕方ないとは言え、フローラの狙撃が無ければ、戦場において一瞬にして空中分解するであろうもの。

しかしながら睡蓮の性格上、チームワークとは程遠く、タイマンを常に望み、独断専行ばかりする。

であるならば、頭ではなく、体に覚えさせよう。それがヴィータや　なのは　の考えである。

生憎と発案者たる二人は、部隊長室にて重要な会議があるため訓練

監督はできない。

そこで、シュガーにお鉢が回ってきたという訳である。

正直、シュガーは却下したかったが、ジェーンがそんな面倒なことをするわけではないし、ティアナは自分より頭の回転が早く、会議に出るならばシュガーよりも適任だ。故に、シュガーは散々嫌がった拳句、訓練施設に赴いているというわけだ。

そして、あーそーかい、と聞き流す睡蓮を尻目に、訓練が開始した。シュガーと睡蓮達の距離は約100メートル。エルマの射撃魔法の、ギリギリ有効射程内。

既に睡蓮・綾乃・エルマは各々の武装を起動。対してシュガーは、デバイスを立ち上げず、無手のまま。

ギリリ＝睡蓮の歯ぎしりの音。

自分（達）を相手にするならば、武装する必要すらないということか？　と苛立ちを募らせる。

「おい、睡蓮――」

綾乃の言葉が言い切られる前に、睡蓮が飛び出す。特甲の魔力雷撃値は102%。物理干涉有り：殺傷設定。

弾丸の如く突撃【シュトゥルム】する睡蓮の拳は、けれども目標を

穿つことはない。

「なるほどな。殺すつもり迷いの無い一撃だけれど——甘い」

背後から聞こえたシュガーの声。睡蓮は己の野生のままに前転。赤紫の刃を間一髪で回避した。

空振り〃チャンス。

「後で反省書は書いてもらうからな！」

「睡蓮ちゃん！ めっ！」

後続のエルマが散弾式に魔力弾をバラ撒き、綾乃が長ドスを下段に構えながら、追撃をかける。

散弾による、点ではなく面による攻撃は、防御力の低いシュガーに回避を選択させる。

それが綾乃の狙い。睡蓮がいる方の逆にサイドステップし、シュガーに挟撃をかけるのだ。

回避行動と攻撃行動は同時にはとれない。綾乃の、単純かつ効果的な戦術は見事に的中。

シュガーは回避を選択し、綾乃の目の前に躍り出た。

とつた！」綾乃の確信。

「惜しいな。その戦術は正解に近いが、それでは一手足りない」

空を切る綾乃の斬撃。シュガーがの回避スペース約180°をカバーする攻撃。誤算は速度。綾乃の攻撃速度よりも、シュガーの回避速度+移動速度+攻撃速度の和が下回っていたというだけの話し。

「綾乃ちゃん！」

シュガーの一撃によって綾乃は気絶、リタイア。それによって精神を乱されたエルマ。

「エルマあー！」

それを、睡蓮の喝が冷静にさせた。普段能天気なエルマ。空気が読めないエルマ。けれども、睡蓮の溢れんばかりの怒りは、そんなエルマにも強く感じられた。そして、同時にエルマは悲しく思う。

エルマは争いを好まない。人を傷つけるどころか、道端に生きる草花を踏むことにすら忌避する少女だ。故に、睡蓮の怒り、そして隠しきれない憎悪の念は、エルマに深い悲しみを与えた。

再び始まる睡蓮の突撃。参謀を失った二人にできることは、愚直な

前進のみ。

二人はシュガーを幻惑するように周囲を高速移動。エルマは当たらないと解りきった射撃魔法を、シュガーの足止めに専念し、睡蓮がその隙を窺いながら逃げ道を塞ぐ。

その様相は、さながら野生の狼の狩りのよう。知識も理性もかなくなり捨てた、野生に基づいた戦法だ。

野生とは違うのは、相手が小鹿ではなく、狡猾で熟練した凄腕の狩人であるという点。いや、狩人とは言えない。何故ならば、彼が行うのは、常に殺人のみであったのだから。

野生は、殺人鬼の透明な殺意を感じとり、身をすくませ、そして、

「ぐ、あ」

「きゃ！」

その仕事を、完了させた。赤紫の刃は既にその手にはなく、魔力強化された手刀による、迅速なる一撃が、二匹の獣の意識を刈り取ったのだった。

11 / the girls wish

意識を取り戻し、シュガーから問題点を指摘され、本日の訓練を終了した睡蓮達は、別の訓練を受けていたフローラと合流し、食堂へと向かった。

道中、不機嫌オーラ全開の睡蓮に首を傾げるフローラ、溜め息を吐く綾乃、涙目になるエルマ。

それぞれがそれぞれの想いも、思想も、感情も、ほとんど理解できぬままに歩を進めていった。

途中、エルマとフローラが空気を変えようと話題を振るが、ことごとく睡蓮に話しが回ったところで終了するため、ついに諦めた。

食事中も終始無言。食堂は大勢の人で賑わっているはずなのに、睡蓮達フォワードチームの周りだけは、かちゃかちゃと鳴る食器の音が、やけに大きく聞こえる。

四人の中で最も早く席をたったのは睡蓮。手早く食事を済ませると、右手に持ったジップライターを弄りながら、去って行った。

そこで、残された三人が同時に息を吐く。

「睡蓮ちゃん……」

ぼつり、と囁くように去って行った少女の名を呟くのはフローラ。

彼女の電波的直感は、睡蓮のココロを明確に感じとらせる。

——曰く、悲しみ。

睡蓮の憤怒に混じる悲しみ。それに乗って同時にやってくる、エルマの悲しみ。心から痛みを嫌う少女達の、ナイフ片手のシーソーゲーム。

「睡蓮ちゃんと話してくる……………」

席を立ったのはエルマだった。フローラは直感で、綾乃は長年の経験でエルマの気持ちの動向をしていた二人は、無言で頷く。

エルマは、きゅっと唇を結んでそれに頷き返すと、睡蓮が消えていった方へと駆けていった。

エルマが睡蓮を見つけたのは、夜の帳がすっかり落ちた頃。誰もいない、訓練施設近くの雑木林。睡蓮は特甲ナシの、通常義肢での格闘訓練を行っていた。

「睡蓮ちゃん……」

睡蓮「無視。黙々と、『影』を睨み付けて拳を振るう。」

「睡蓮ちゃん!!」

沈黙の森林を侵すような大声量。喜びを体現するかのような少女の、真剣な旋律。ただひたすら拳を振るっていた睡蓮は動きを止めて、射抜くような視線をエルマに向ける。

「……………」

ただ、無言。時間が惜しいとばかりに。去れとでも言うように。

「わたしはね、睡蓮ちゃんが、どんな過去があるかなんて分からない」

特甲局員は、例外無く人間の四肢を失っている。つまり特甲局員は、例外無く暗い過去を持つ。エルマも、そのことは知っている。だからこそ、エルマはここに来た。

「けど、いつも怒ってばかりじゃ、いつも憎んでばかりじゃ、前に進むなんてできないと思う!!」

かつて、睡蓮と関わった人間は、彼女を叱りつけた。分かるはずもないのに、同情するようなことを言った。誰ひとりとして、彼女に自分自身を本気でぶつけた人間はいなかった。睡蓮にある意味依存しているフローラはもちろん除外。全くの初めての経験に、睡蓮は戸惑う。鼻の奥がつんとして、目の奥から何かが込み上げるような感覚。睡蓮はそれを無視して、声をあげようとする。

違う、と。オレは違う。オレにはそれしかない。オレはそれだけで進んで来たのだと。

けれど、弱い少女でしかなかった自分が言う。目の前の女の子の言う通りだと。

「ごめんね。わたし、バカだから。うまく言えないけど、みんな、なかよしに、なって、ほしくて……」

途切れながらのエルマの声には、いつしか嗚咽が混じる。悲しくて、悲しくて、涙が溢れて止まらない。

「訓練の邪魔してごめんね。そ、それじゃまた明日がんばろっ！」

花の咲くような。睡蓮はそんな例えが出来そうな笑顔で。涙でくしゃくしゃになった顔をするエルマが、羨ましく思えた。走り去っていく背中が、ひどく遠いものに思えた。

「うるせーよ……」

存在否定。自分の偽る心の行く末。破滅へと駆け抜けて行く自分。

ぐちゃぐちゃの感情と、胃の奥に鉛が沈んでいくような錯覚。けれどそれは不快ではなくて、渴いた大地に染み込む雨のようにも感じるもの。

「うるせえんだよ……」

けれど、睡蓮はそれを認めるわけにはいかない。特甲の力を手にいれた理由の根底。憤怒は憎しみ。復讐の感情。獣のような、本能に身をまかせた感情。それは間違いじゃなかったと、今でも思う。だから、自分はエルマのような考えはできない。睡蓮は、持たざる者。

既にその身は兵器なのだから。

「うるせええんだよおおおおお！」

兵器たる自分から、涙がこぼれるなんて、ありえないことなのだから。

12 / War arouses the animal in man

翌日早朝。眠りこける機動六課を叩き起こしたのは、目覚まし時計やアラート音ではなく、爆発の音だった。

直後、けたたましいアラート音が鳴り、訓練された動きを強制させる。

慌てず。騒がず。冷静に。しかし迅速に戦いの準備を行うのだ。

「なんや。こんなもんかいな。期待してソンしたわ」

その様子を見るのは、機動六課隊舎正面にいる男。短く逆立った真っ赤な髪に、黒縁の眼鏡の奥に光る獣の瞳。コンクリートジャングルに紛れる灰色の迷彩服を着た、フュリオと名乗る傭兵である。

「まっ、平和ボケした阿呆どもにしちゃあ速い対応とは言えるんやろうけどな」

隊舎から出てくるのは四人の少女を含む10人の武装管理局員。空からさらにエースオブエース、高町なのはと、鉄槌の騎士ヴィータ。フュリオの後ろに控える8人の部下達は、それを確認して一斉に突撃銃型のデバイスを構える。

「やりいや。塵も残さずに燃やし尽くせ」

フュリオの拳げられた左手がトリガーとなって、一斉に発射される

それが数人の局員の頭部を捉えて、血飛沫を上げる。

「おやおや。びびっとんのかい。こらあ、ワイの仕事はすぐに終わ
りそうやなあ……。あのカタブツのアーサーは反対側から突入し
とる頃やろっし」

死。それは、人間に恐怖をもたらす、最たる事象。非殺傷設定を厳守する管理局には、遠い世界の話し。いくら多少の訓練を受けても、拭えるものではない。

「ほな、とつとザコを蹴散らして帰るで――」

「オレの目の前でえ……………勝手にんじゃねえええええ！！」

迎撃する、一人の特甲局員を除いて、の話であるが。

壁のような弾幕をもともしない。襲いかかる死を悉く無視するく

わえタバコの少女を見て、フュリオは眼鏡の奥で三日月のような笑みを浮かべた。

「なんや。おるやんけ。ちったあ楽しませてくれそうな小娘が」

隊舎を飛び出した睡蓮達は、襲いかかる暴力を目にした。隊舎三階で狙撃体制に入っているフローラは当然として、フォワードメンバーは回避又は防御になんとか成功し、負傷はない。が、練度の低い局員の頭が吹き飛んだ様を見て、精神に深いダメージを負った。

フローラ「観測機ごしの光景を見て嘔吐。

綾乃「平静を装うが、青くなった顔は隠せない。

エルマ「咄嗟に隠れた隊舎の壁の裏で、震える体をぎゅっと抱きしめる。

そして睡蓮「憤怒の赤。限界値ギリギリの雷撃値に設定した特甲義肢の拳で、弾丸を撃ち落とす／撃ち落とす／撃ち落とす。深紅の魔力を纏った純粹な暴力で、襲い来る暴力を打倒していく。

そして突撃／特攻。

無謀とも言えるそれは、けれども迷彩服の8人が放つ死をもともしない。くわえられたタバコを吐き捨てながら、死の恐怖を忘れたかのような憤怒の表情で、ありったけの大声で叫ぶ。

「オレの目の前でえ……………勝手してんじゃねえええええ!!」

迷彩服の男達を無視。主犯格であろう赤毛の眼鏡男に迷い無く突進。必殺の拳を振るうが、バックステップで回避する。

睡蓮の攻撃の結果、相手には被害無し。しかしながら味方には十分な効果。猛々しき彼女の姿は、及び腰になった者たちを鼓舞するには充分過ぎた。

——そして、戦争は始まる。

「なんや、おもしろいやっちゃのう。その蛮勇を讃えて、ワイが相手してやるわ。お前らは他の奴らと遊んどれ」

——瞬間。深紅の拳と鉛色の拳が交差した。

同時刻。その上空にて、三人の戦闘が既に開始していた。

いや、それは戦闘などとは言い難い。あまりにも一方的なものであったからだ。

なのはのディバインバスターと、ヴィータの鉄球が対峙する金髪の青年へと殺到／圧倒。素人目に見ても青年の敗北は必至であると言えよう。

「やれやれ、こちらはまだ名乗りもしていないのに。ずいぶんとせっかちなですね、エースオブエースは」

故に、その状況で傷一つない青年に、なのは達は目を見開く。戦いを理解する二人の行動は先制攻撃。既に強襲によって先手を取られている以上、これ以上は相手に主導権を渡すわけにはいかないからだ。

「貴方は、誰ですか？」

魔導師の杖を構えるなのはには隙も油断も無い。いつでも行動に移れるようにと構えを取る。そして、先制に失敗したならばせめて情報を得ようと口を開いた。

青年は、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに人懐っこい笑みを浮かべ、未だ徒手空拳のまま、恭しく頭を垂れる。

「初めましてエースオブエース、鉄槌の騎士。私の名は『許可』のジェイス・ベヘレン。四剣聖の一人です。まことに申し訳ありませんが、貴女達を傷つける意思はありませんが、私達の時空監視局の理想の一步のために、少々お時間を戴きます。……………では――」

始めましょうか。

青の担い手は静かに宣言した。

——暑い、熱い夏が始まる。

おかしい。疑問がなのは頭を支配する。どれだけの魔法を打ち込もうと、ジェイスと名乗る青年に届くことはかなわない。

ヴィータがいくら接近しようとしても、すぐになのはの隣まで転移させられる。

その際に魔法陣の出現は無い。ただ青い光が放たれるのみ。それだけであらゆる行動が阻害される。

ジェイスの、「ふむ。それは許可しましょう」という声に苛つきを覚える。

まるで、本当に全ての行動が彼の『許可』無しでは許されないようだった。

そのくせ青年からは攻撃魔法は一切無い。バインドを始めとした補助魔法すら無い。接近した時に発動される強制転移魔法と、なのはとヴィータの魔法を無力化する魔法のみが繰り出される。

「クソッ！ 埒があかねえっ！」

ヴィータが悪態をつく。戦いは、千日手となっていた。

「うるうあ！」

一方の地上。睡蓮の気合いの入った拳に鼓舞されるように、戦いは激しさを増す。

シヨックは未だに隠せないが、綾乃、エルマ、フローラ、そして残った武装隊の面々は、襲撃者に応戦する気力を取り戻した。

「は、ええなあ。アンタ、オモロイやん！」

「うつせえ！」

睡蓮の拳と、フュリオの右腕の手甲に装着されたブリッツセイバーが交差する。

フュリオⅡ特甲。

火花が前髪を焦がす、超接近戦。ヘタな絶叫マシンを上回る極限のスリル。睡蓮の憤怒とフュリオの愉悦。

拳と剣が交差の度に、汗が舞い、二人は舞踏のような戦いを続けるのだ。

甲高い耳障りな音と爆音が支配するそこは正しく戦場であり、くだらない偽善が一笑にされる本能の支配する地であった。

「——アカン。時間やわ」

その戦場にてフュリオがそう溢したのは、綾乃が襲撃者の背中を袈裟に切り捨て、鮮血が散ったのと同じだった。

それまで戦闘と戦場に酔うように睡蓮と武器を交えていた男は、愉悦と陶酔が入り交じったような表情を曇らせ、睡蓮の足下に左腕に取り付けられたバルカン砲で牽制しながら後退する。

「待ちやが——」

睡蓮が叫ぼうとして、一発の銃声がそれを遮った。

そんなものが朝の鳥の轉ずりよりも賑やかなそこにおいて、その一発の銃声はやけに耳に鳴り響いた。

――瞬間の暗転。そして世界はモノクロになる。

いつの間なのか。フュリオのブリッツセイバーは刀身を上下にスライドさせ、ライフルのような砲身を顕にしていた。

そこから放たれた一発の銃弾は睡蓮の心臓を目掛けて、モノクロでスローな世界を直進していく。

喉が動かない。体が動かない。世界はこんなにもスローなのに、自分の体は途中で石像のように停止している。

――顎部に埋め込まれた専用デバイスが、睡蓮の脳に一つの警告を鳴らす。たった一つの言葉で、TIME OVERである。

時間切れ。電池の切れたオモチャは止まる。電池はオモチャが激しい行動をしようとするたびに寿命を縮める。

魔力切れを起こした特甲は、兵器でも義肢でもなく、体を縛る枷に
しかなり得ない。

睡蓮は脳の視覚野に投影される0という数字の羅列を見ながら、

「睡蓮ちゃん！」

その言葉と共に、モノクロの世界で崩れ落ちるエルマの姿を見た。

睡蓮の意識は、そこで真つ赤に途切れる。

次に睡蓮が色を取り戻した時に見えたのは、真っ白な病室のカーテンだった。

一瞬だけ未だにモノクロの世界に取り残されたのかと睡蓮は考えたのだが、視界の端に映る牛乳パックを見て安堵した。

ぼんやりとした頭をその牛乳を飲むことでなんとか覚醒させて、枕元にあるであろうナースコールのスイッチを探すが見当たらない。

仕方なく睡蓮は顎部に埋め込まれたデバイスを起動しようとして、

「起きたか、睡蓮」

カーテンを開けてやってきた綾乃を見た。

綾乃の顔色は優れているとは決して言えない。むしろ凄まじく悪い。その姿は墓場を蠢く幽鬼といった風情であり、とても生者とは睡蓮には思えなかった。蒼白な顔面と、泣き腫らしたのか、真っ赤な瞳が睡蓮の胃に鉛を落としたような得体の知れない不安感を煽る。

「睡蓮。単刀直入に言う」

綾乃は震える唇と拳を抑えながら、重々しく口を開いた。

「襲撃者の撃退には成功した。駆けつけたインターセプターの協力と、高町隊長の元教え子によってな。それに、お前が先陣を切って戦ってくれたおかげで、私達は戦う心を思い出せた。礼を言おう。だが被害は甚大で、死亡者もいる。その中には……………」

綾乃は一拍の呼吸をおいて、目に涙をいっぱい溜めながら言った。

「——エルマがいる」

睡蓮に弾丸が放たれた瞬間、睡蓮を庇うように飛び出すエルマを、綾乃は見た。

綾乃はその光景がひどく神々しく、尊いものと思った。

夏の日差しが爛々と光るエルマの瞳をさらに輝かせ、むせかえるよ

うな熱風が翡翠色の髪をなびかせていた。

次の刹那、真つ赤な血液を背中から吹き出しながら、エルマはもつれながら倒れる。

綾乃の思考は真つ白になって、次の瞬間に視界が真つ赤になった。

「貴様あ
あああ
あああ
あああ！」

立ち塞がる襲撃者の首を跳ねながら、赤に犯された銀の刀を下段に構え、特攻する。

その姿はさながら夜叉か羅刹。綾乃自身、自分が人間であるという誇りさえもかなぐり捨てた嵐よりも苛烈な特攻。

斬／斬／斬Ⅱ死体の数。

これは戦争。犯罪者を制する戦いでは無く、どちらかの思想を叩き潰すための闘い。

これは戦争。相手を殺すほどに賞賛される、狂った日常のスタート地点。

「死ねええええ！」

辿り着いたゴールは憎悪の対象。黒い魔力とヒトの血液を帯びた禍々しき刀は――

「アカン。時間切れゆーたやろう。ドアホウ」

あっけなく空を切った。型もなにもない憎悪の一撃は、戦闘巧者のフュリオに届くはずもなく、ほんの少し体をずらただけで回避され、鋭い蹴りの一撃で綾乃の刀は吹き飛ばされた。

「ワイかてまだまだ楽しみたいんや。けどなあ、雇い主が五月蠅いんでなあ……………」

飄々とそう嘯くフュリオに、綾乃は苛立ちと憎悪を隠せない。痛みを訴える脇腹も、燃え盛る太陽も、そしてなにより目の前の男の全てが憎い。

しかしながらその憎悪を受けながら、フュリオは鼻歌混じりに懷から取り出した機器を操作し、淡い青い光に包まれて消え去った。それは、ジェイス・ベヘレンがなのは達の前から同様に消え去った時と同時刻のことであった。

.....それからのことは、良く覚えていない。

綾乃は不思議に思う。あの日のあの時の記憶が途中から朧気になっていることに、今更ながら気づいた。

物言わぬ骸となったエルマを抱いて、聞き分けの悪いガキのように泣き叫んだことは覚えているが、睡蓮とフローラが『検査』に出されるまでの記憶が無い。

不自然過ぎる。不自然だが、頭はそれ以上の追求を拒否した。

「あー、なんとなく状況は掴んだ。.....悪い。ぜんぶ、オレのせいだ」

押し黙る綾乃に、睡蓮は頭を下げる。彼女の精一杯の謝罪の気持ち
が綾乃に突き刺さった。

「オレの――」

奥歯をギリリと鳴らし、睡蓮が凝視したベッドの掛布団には、小
なしみがいくつも出来上がっていた。

「私たちは、生きている」

唐突な言葉に、睡蓮は綾乃の顔を見た。
それは、まるで聖母のような微笑みだった。

「エルマは言ったんだ。死ぬ間際の病室で。私たちに、平和を作
ってほしいと。だから私たちは生きていくしかないんだ。無力でも、
いつか来る平和な時を過ごすために」

「わりい、ちょっとだけ一人にしてくれ」

その微笑みから逃げるように、睡蓮は顔を背ける。モノクロの世界
がまた帰ってきたような気がして、少しだけ怖くなった。

「ああ」

綾乃は恨み言一つ言わない。それは睡蓮には理解できないモノで、自分は本質的には目の前の少女よりも遙かに弱いということを、まざまざと見せつけられているように思えた。

「あ、そっぴや聞き忘れた。オレはどのくらい寝てた？」

病室の引き戸に手をかけていた綾乃に、睡蓮は思い出したように聞いた。綾乃は振り返らず、

「三ヶ月だ」

とだけ短く答えた。

15 / SHORT HOPE

すっぱー……………。

機動六課のヘリが離着陸する屋上にて、睡蓮は一人、タバコをくわえて紫煙を憐く吐息した。

気分はブルーを通り越してブラック。なんかテロでも起きねーかなーと、絶えず憂さ晴らしを要求する有り様。

憂さ晴らしでもしないと、脳みそにまとわりつく蜘蛛の巣に似た何かに捕り殺されてしまいそうだった。

フローラのこと、綾乃のこと、エルマのこと、そして自分の知らない自分がいるような気がする。

全てが複雑怪奇に絡み合い、今現在の気分を加速させては墜落させて行く。

睡蓮の頬を、秋の風が撫でた。秋の風は未だに夏の残り香を含み、夏の終わりを否定するには十分な熱気を帯びている。太陽は丁度睡蓮の頭上にあり、ジリジリと肌を焼く。

このまま自分を焼きつくしてくれたら、どんなに楽だろうと意味の無い思考が一瞬だけ浮上して、すぐに意識の海に沈殿した。

——平和な世界。

エルマが望んだ未来。呪いのようにつきまとう言葉。

そんなもの、どこにもありはしないと言っのに。

ミッドチルダだって平和な世界と呼ばれていた所だし、あんなことが無ければ、普通に暮らして幼い夢を一生の目的にしていただろう。

ところで――

「あたしの夢ってなんだったかな？」

幼い頃はそれをバカの一つ覚えのように話していたと記憶している。

けれど、今は思い出せない。

弱気で内気で陰鬱な思考は、殺したはずの「あたし」に生命を吹き込む。

『あの日』に生まれた「オレ」に殺された「あたし」は、小さな女の子のまま。タバコの煙が肺を満たしても、小さな女の子は薄れることはなく息づいている。

「あたしは、何だったかな？」

繰り返す自問に答えは出ない。もとよりそんなものは存在しないと
言わんばかりに。

焦り／痛み／弱気／臆気／記憶／夢。

願い／希望／平和／友情。

突然覚えた頭痛に、睡蓮は膝をついた。世界がノイズにまみれて現
実感を喪失させる。タバコをくわえたまま下を向いたせいで煙が目
に入り、少しだけ涙が出た。

煩わしい。

睡蓮はそのままタバコを吐き捨てた。

現実感を失った現実の中で、頼りない自分自身を探し出そうとして、
真っ赤に染まった世界を覗き込む。

真っ赤に染まった世界の自分は、おぞましい快感に酔いしれ、美し
く日常を侵食した。

「——思い出した。オレが、あたしが殺したんだ」

□□□□□□□□

三年前。運命の日。虫の息ではあったが、数多くの命があったんだ。

空から降る灰色の多くは、一瞬で命を失わせたわけじゃなかった。

死に行く人々にトドメをさしたのはあたしだ。

けれど、四肢を失った経緯が分からない。特甲を得ようとしたきっかけは忘れた。

違う。最初から『理由なんてなかった』んだ。

ノイズまみれの過去を思い出して、あたしは立ち上がった。それから特甲化せずとも強力な筋力を誇る機械義肢で駆けていく。目標はフローラの自室だ。

エルマの死亡から引きこもりっぱなしのアイツから聞かなければならない。

『昔』のことを。『昔』を覚えているのかを。

屋上に取り残された、火がついたままのショートホープが、そのまま燃え尽きた。

□□□□□□□□□□

『昔』、あたしがまだ5歳くらいの頃だろうか。
黒塗りの顔をした母親、今はもう声さえ思い出せない母親が、睡蓮
の花言葉をあたしに教えた。

『純粹の心』『甘美』『優しさ』『純情』『信仰』。そして白い花
は『純粹』『潔白』。

あたしの白い髪を撫でながら、母親は嬉しそうにそんなことを語っ
ていたと記憶している。

記憶なんてあやふやなものだが、確かな現在に繋がる過去だ。
自分を形作るものだ。

あたしはオレに殺されて忘れていたけれど、やっと少しだけ思い出
した。

「フローラ！！」

あたしは感情のままにフローラの自室のドアを開け放つ。

部屋の中はカーテンで締め切られて、光は僅かにその隙間から差し込む太陽光のみ。

宿舎の廊下から見えた内部は、整理整頓を心がけるフローラからは信じられないほどに物が散乱していて、足の踏み場もない。

視線を奥へと移してみると、ベッド膝を抱え込んでいるフローラが見えた。

「フローラ」

あたしは出来る限りの優しい声色で話しかける。

まるで死人のような小さな身体は、脈打つようにぴくんと跳ねた。

そして、ゆっくりと上げられた顔。見るからに生気が無く、痩せて頬骨が少し浮き出ている。

「あ、睡蓮ちゃん。久しぶり……」

「ああ」

蚊の鳴くようなとはこのことを言うのだろう。小さな小さなその声は、空を飛び始めたばかりの雛鳥のように頼りなかった。

フローラには電波的とも言えるほど、感情を読み取る力に優れている。

戦場に渦巻く他者の感情と、内からせりあがる悲しみの感情が、強すぎる感受性によって受け入れられたなら、どうなるかなんて想像は容易い。

けれど、あたしはフローラに手を差しのべない。たった一つの問いを投げ掛けるためだけにここに来たのだから。

「フローラ、聞きたいことがある。お前、『昔』のことをどれだけ覚えている？」

「わかんない……………」

「そっか」

思った通りだった。今のフローラの状態を加味すると、怪しいものがあるが、やはりあたし達特甲局員は、過去を欠落している。

小さな夢も。儚い希望も。

「できるだけ、思い出してみるといい。あたし達には、それが必要なことなんだ。あたし達には戦うことしかできないけれど、『昔』夢見た未来ってやつをさ、もう一度だけ見つめてみて欲しい。エルマが願った未来は、きっとその中にあるのかもしれないから」

「……………うん」

あと、ちゃんとメシ食えよ、とだけ言っであたしは部屋から出た。

思い出したあたしの昔の夢は、ケーキ屋さん。

誕生日に食べたケーキがあまりにも美味しくて、幸せな気持ちになったから、あたしも誰かに幸せな気持ちになってほしいと思ったんだ。

けれどそれは、この手『特甲』によって殺された夢。だから叶うことなんてありえない。だがもしも世界が真に平和ならば、それは幻想から現実になりえるのではないか。

憤怒。原初の憤怒。それは、夢を否定した世界への憤怒。

握りしめた拳は今はまだ小さいけれど、理不尽を殴り倒せる大きな拳に鍛え上げていけば、もしかしたらあたしの夢は叶うかもしれない。

ちっばけで能天気な夢だけれど、きっとそれはエルマも喜んでくれる未来だと思うから。

あたしはフローラの部屋から出ると、一直線に訓練施設へと歩を進める。

ここ何日かフォワードチームメンバーの誰も使っていないであろうそこで、未来を切り開く拳を鍛え上げながら、二人が来るのを待つために。

綾乃とフローラ。

特に綾乃はあたしよりも強いから、きっとすぐにあたし達の未来が始まるだろう。

そしてフローラも。アホみたいに明るいアイツなら、きっとまた笑顔と困り顔と探しだした夢を引き連れてすぐにやってくるだろう。

あたしの、あたし達の物語は今から始まるんだ。

16 / 睡蓮の花

□□□□□□□□□□

叩く。叩く。叩く。一人の訓練で、あたしは一心不乱にサンドバックを叩く。

より強く、敵を確実に打ち砕く拳にするために。

あれから二日。訓練施設には、あたし以外に人は来ていない。隊長達は会議と監視局の対応に追われているらしく、またインターセプターの連中は自分の巣に一時帰投しているらしい。

ま、今は関係ないか。

エルマが望んだ未来を作るのは、あたし達でなければならない。それは綾乃もフローラも分かっているはずだ。

だから、あたしは二人が来る事を信じて待つだけだ。

と、噂をすればなんとやらだな。

「おう、遅かったじゃねーか」

あたしは手を止めて、訪問者を歓迎する。

訪問者は綾乃だった。鞆に納まった状態だが、長ドス型のデバイスを起動させている。確か、銘は雪花だったか。

「ああ、遅くなつて悪いな睡蓮。私は覚悟を決めたよ。実を言うとな、私は怖じ気づいていたんだ。あの日、エルマが死んだ日。私は無我夢中で敵を切り殺した。平和のためだとか、エルマの仇だとか、そんなことを心の楯にしてな。人を殺めたことに何も感じていないと言えば嘘になる。雪花に染み付いた血の臭いは消えないし、鼓膜には断末魔の叫びが張り付いている。けど――」

綾乃は罪を告白する罪人のようだった。一時そこで言葉を区切り、閉じていた目を開く。その瞳には迷いが無い。

「私は戦い続ける。戦い続けることでしか、きっとこの罪は償えない気がするんだ。それに私は、エルマと約束したからな」

「そっか」

あたしは短く答えた。ソレ以上の言葉なんて、野暮なだけだったから。

「手合わせ願おう。時空管理局新設遊撃小隊『ケルベロス』小隊長、
睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー」

「了解だ綾乃。ブランク明けだからって手加減はしないぜ」

□
□
□
□
□
□
□
□

拳と刀が交差する。付きだしたあたしの拳と、綾乃の刀は、一度たりとも空を切ることはない。

お互いがお互いの想いを主張し認め合うようなそれは、見知らぬ誰かをぶん殴るよりも楽しかった。

「綾乃！」

「なんだ!？」

手は止めず至近距離の攻防の中で、あたしは声を張り上げる。

「あたしには、忘れていた夢があっただ！」

「……………」

綾乃は後方にさがり、目を丸くしてあたしを見る。

オレからあたしになったことに関して驚いているのか、それとも模擬戦中に夢を語り始めたあたしに呆れているのか。

「そうか。どんな？」

そのどちらでもないようだった。穏やかな表情で綾乃は続きを促す。

「ケーキ屋だよ。あたしが小さい頃。誕生日に食べたケーキにスゲー感動してさ、それで憧れたんだ。あたしも、いつか誰かを幸せにできるケーキを焼きたいと思ったんだ」

「そうか。いい夢だな」

綾乃は笑うことなくあたしの夢を肯定した。それがなんとなく気恥ずかしくて、あたしは意味もなく、

「なんだよ、真面目に聞きやがって。どーせあたしにゃ似合わない

とか思ってたんだろ？」

そんなことを言っていた。綾乃は再度目を丸くして、声を上げて笑う。

あたしもそれにつられて笑った。

「いや、そんなことはないさ睡蓮。本心から良い夢だと思ってるよ」

ひとしきり笑って、綾乃は真面目な顔をして言う。

ああ。そんなことは解ってるさ。お前は他人の夢を笑うようなヤツじゃないってことくらいな。

と、そこで訓練施設の入口に人影が見えた。

「来たようだな」

「ああ」

それはフローラだ。

真っ直ぐにこちらに歩みよってくる。

その瞳には光が戻っているようだ。

「よう。遅かったじゃねえか」

あたしはショートホープを口にくわえ着火。一呼吸。ピツと火のついたタバコをフローラに突きつけて言った。

「タバコは二十歳になってからですよ、睡蓮ちゃん」

柔和な笑顔いつもの敬語。どうやらコイツはもう大丈夫らしい。

「睡蓮ちゃん。私、思い出しました。『昔』の夢を。私は歌手になりたかったんです。みんなが元気になるような歌を、たくさん歌いたかったんです。私はそのために、その夢を実現できる世界にするために戦います。それが天国にいるエルマちゃんを喜ばせることができる唯一の方法だと思いますから……」

「そっか。いい夢だ。頑張れよ!!」

あたしと綾乃とフローラ。三人がそろった。

うし、じゃあ辞令を読み上げるとしようか。ちよつとだけ綾乃にフライングされた気がするが、気にしないことにして。

「よし、これでメンバーがそろったな。本日よりあたし達は機動六課を離れ、遊撃小隊として動くことになる。小隊名はケルベロス。あたし達は三人で一匹の獣だ。あたし達ケルベロスは、三頭を持つ」

て平和を脅かすアホ共を食い散らかす。小隊長は上層部が何を血迷ったか知らんがあたしだ。これから、よろしく頼む！」

「了解した、隊長。私は異存は無い。睡蓮が隊長ならば、私よりもケルベロスを獰猛で勇敢な獣とすることができだろう」

「了解しました！ 現時刻をもって、フローラ・ベヘレン二等特甲士はケルベロス小隊に力を尽くします！」

力強い二人の言葉。覚悟は決まった。ならば、あたし達は目標に向かって爆走するだけだ。

「始めるぞ！ あたし達の本当の未来をな！！」

おーっ！、と気合いの入った掛け声が九月の空に上がった。

あたし達はケルベロス。三つの頭を持つ獣。

平和を守護する、番犬となる。

辞令

睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー二等特甲士、フローラ・ベヘレン二等特甲士、黒崎綾乃二等陸士の三名は、本日より遊撃小隊、ケルベロスとしての活動を、全小隊員の回復が完了し次第開始せよ。小隊長は、先の機動六課襲撃事件において、獅子奮迅の活躍をした、睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー一等特甲士に任命する

主な任務は苦戦地域への支援及び、時空管理局の正統性・正当性を広報することである。

諸君らの健闘を期待する。

β / a r m s (前書き)

ここで、私自身の確認の意味も込めて、各キャラクターの武装をまとめておきたいと思います。

本編とは直接関わりが無いため、読みとばして頂いても結構です。

β / a r m s

□ ナックル型特甲

睡蓮の特甲。蓄積された魔力を衝撃波として放つもので、四トン前後の破壊力を持つ。

当然ながら非殺傷設定で、通常時でも一トンほどの威力を持つ睡蓮の拳で対象を殺害することを避けるため、衝撃方向とは逆のベクトルに魔力が噴出すると同時に、インパクト部にシールド魔法の応用となるクッションが展開する。

術式は全てオートであるため、睡蓮本人の術式構築は必要としない。戦争状態になった現在では、殺傷能力を持たせるために、逆ベクトルの魔力噴射とクッションがオミットされる。

極めて強力な武装であるが、それが全てであることが最大の欠点である。

尚、戦闘用の特甲は睡蓮の脳神経ともリンクしている。

魔力切れ〃タイムオーバーとなると、残存する予備魔力の暴走・暴発を避けるため、強制的に戦闘行動を終了させるべく睡蓮の意識が途切れる。

□ ライフル型特甲

フローラの特甲。リンカーコアは無くとも、魔力との親和性が高く、自力で魔法を構築できる脳力を持つ者に支給される。

その特性上、魔法構築を完全に特甲を頼りにする第一世代の物とは異なり、単純な魔力衝撃波だけでなく、術式の単純な射撃魔法を使用することができる。

ただし魔法戦闘を可能にするとはいえ、リンカーコアの無い人間を媒体としているため、どうしても魔導士と比べて安定性で劣り、第一世代特甲と比べて爆発力で劣る。

しかしながら、特甲の筋力を持ったまま魔導士戦闘を行うことができるため、第一世代特甲や魔導士にはできない戦闘を可能とするポテンシャルを秘めている。

□ アメジスト

シュガーの新たなデバイス。大破したラピスラズリの代わりとなる後継機。

インテリジェントデバイスであるが、非常に無口。

待機状態はラピスラズリを思わせる短刀型で、起動するとチェーンソーとなる。

カードリッジシステムを採用しており、魔力量がエース級魔導士と比べて低いシュガーに高い戦力を持たせている。

また、シュガーの失われた右腕の代わりとなる特甲とリンクし、更に強力な一撃を放つことができる。

□ ファントムミラージュ

大破したクロスミラーージュの後継機。ティアナの強い要望により、なんとか破損を免れたデバイスコアを移植している。クロスミラーージュより高い演算能力を持ち、ティアナの魔法の精度を高めている。

□ ブリッツセイバー型特甲

フリオの特甲。要するにガンダムエクシアのGNソード。大きく違うのは、ライフルが内蔵式で、両刃剣が上下にスライドすることで砲身が覗かせる。

特甲の製造元は管理局ではないため、質量兵器を搭載している。

□ 陽炎

四剣聖の一人、ジャンのデバイス。大剣型のアームドデバイスで、その姿無骨なに似合わず、ジャンの幻術をサポートするために、複雑で繊細な演算を可能とする。

□ 百花

四剣聖の一人、紫陽花のデバイス。レイピア型のアームドデバイスで、特甲の技術との応用でできており、液体金属を噴出させ、草花を模する。多角的な攻撃が可能であるが、全ては紫陽花の本質たる超絶な剣技をサポートするもの。紫陽花の二面性を象徴するようなデバイスとなっている。

□ 雪花

綾乃のデバイス。非人格日本刀型アームドデバイス。綾乃の高機動戦闘をサポートことに主眼がおかれたものとなっている。

□ リリアナ

エルマのストレージデバイス。フェイトのバルディッシュを模したレプリカとして製造されたものだが、人格を作り出すAIが積まれている分、高いレスポンスを実現している。

□ ラピスラズリ

本編開始前に行われたとされる、シュガーとジャンの戦闘において大破。デバイスコアごと修復不可能なほどに破損していたが、形だ

けは修理されてマキナのお守り代わりとなる。

前作終了時に、永遠の平和を願って十字架にかけられたが、新たな戦いが始まるとともに、シュガーによって回収されたようだ。

幼い頃からシュガーとともにある、とても主人想いなデバイスである。

β / a r m s (後書き)

16話でPhase?は終了となります。

引き続き、Phase?がスタートします。

ここまで読んで頂いた皆様に深く御礼申しあげます。

ご意見・ご感想がありましたら、随時募集しておりますので、お気軽に書き込んでみて下さい。

へんだーは嬉しさで小踊りします。

□□□□□□□□□□

「超ギリだ……。この衣装を考えたヤツを殴りてえ……………」

ミッドチルダ、クラナガンのド真ん中。残暑厳しい九月の中旬。

あたし、フローラ、綾乃の三人は、ド派手なオープンカーに乗り、ド阿呆な衣装を身に纏っていた。

フリフリレースのスカートに、胸元が大きく開いたふわふわのドレス。背中にはもこもこの羽。

まるで童話から抜け出したかのような妖精ルックである。

綾乃はゴスロリっぽく黒。フローラは正統派お嬢様系で白。あたしは、ケルベロス小隊稼働日から真っ赤に染めた髪の毛に合わせて深紅。

そんな格好のあたし達が公道のど真ん中で何をしているかと言うと、「みなさん、どうか私達に力を貸してください！」や、「管理局こそ正統」的なことをフローラが演説中。

あたし / 綾乃 // オマケ

そりゃさー、襲撃事件で仲間を失ったいたいけな少女達（偽）であるあたしらは民衆の同情票をゲットするにゃあピッタリだろーがな
ー、この惨状を何とかしろ。恥ずかしくて死ねる。くそ。広報任務なんて受けなきゃ良かった。

見ろ、綾乃なんて盛大に顔をひきつらせて——いない。こいつ、営業スマイルを振り撒いてやがる。
道行く人にしっかりと手まで振ってるし。

「お前、順応性が高いのな」
「こついうのは恥ずかしがったら敗けた。ほら、お前も笑顔を無理矢理にでもつくれ」

「無理だ」

心から。

ずどーん。

極限の羞恥の中で、救いの神／敵が現れる。気の抜けた爆発音とともに爆走する装甲車が、あたし達が乗るオープンカーへと突撃。

あたしは思わずニヤリと笑った。

《赤犬、黒犬、白犬、全頭出撃！ 目標、敵装甲車！》

顎骨に移植された通信専用デバイスが、脳内に直接指令を送る。

やかましい。んなこと言われなくとも、あたし達のやることは変わらない。

「いくぞ、野郎共。ケルベロス、疾風怒濤に出撃だ！」

「了解した！ 広報任務よりは遥かにマシだな」

「了解！ 後方に下がり、狙撃にて援護します！」

無線【いぬぶえ】に従い、三頭は一匹の獣となる。

広報任務？ 知ったことか。敵をぜんぶブチ殺せば何の問題もねえ！

迫り来る装甲車に、睡蓮は真正面から対峙する。

そして、声無き声で一言呟く。

――転送を開封。

《了解。特甲レベル2 A型装備を転送》

瞬間、睡蓮の姿が変化する。

両腕はレベル1のそれよりもシャープに。

脚部は変わらないが、背中には揚羽蝶の羽を模した飛行ウイングが追加されている。

飛行ウイングの展開とともに、僅かに頭痛を感じたが、当然のように無視。

「懺悔の時間はやらないぜ！」

晴天をぶち抜くかの如く、高々とファックサイン。

その背後から、黄色の魔弾が装甲車に直撃する。

わらわらと装甲車から出てくる男達。

口々に罵倒の言葉を吐き出しながら、発砲。

睡蓮達のオープンカーを見に来た野次馬達が、散り散りになっていく。

ようやく楽に戦えると睡蓮は獰猛に笑った。

背中が爆発的加速を生み、自身の拳を超える速度で敵に迫る。

特甲Ⅱ殺傷設定。

その拳は、男の頭蓋を容易に打ち砕き、その中身を盛大にぶちまける。

真っ赤な血と、ピンクの脳が鮮やかアスファルトのコントラストとなった。

睡蓮が一人を殺害した隙について、他の男達——時空監視局員が背後から迫る。

「管理局など、もう必要ないのだ！」

男は絶叫しながら拳銃を睡蓮に向けた。

「ケルベロスは三頭で一匹の獣」

しかしその男の腕は、拳銃を持ったまま体から離れる。

「一頭が獲物を喰ったなら、その隙を埋めるのは他の二頭。そうだろう？」

銀色に輝く刃の一刀で首を落とす。蓋【頭】が取れた体からは、よく振った炭酸飲料のように、勢い良く血液が噴射された。

「ああ、その通りだな、綾乃！」

背中合わせの二人が笑う。

その二人の拳と刃が届く距離よりも遠く。さらに別の男が狙撃を試みた瞬間に、その男は黄色の魔弾によって絶命した。

「ああ、まったく。フローラも良い仕事をするよ」

魔弾の先。蜻蛉の羽で空を飛ぶ少女が、スコープを覗き込み、背中合わせの少女を見てにっこりと笑った。

その日より、その小隊は管理局という組織の内外を問わず、大きな話題となる。

三人の少女による遊撃小隊、ケルベロス。

彼女達の季節は、本当の幕開けを迎えた。

時は新暦0087年。狂ったような暑さの、秋の入口のことだった。

18 / black fire

広報任務なんだか殲滅任務なんだかよくわからない任務の翌日。目を覚ました睡蓮はまず、自室の冷蔵庫を開けて、紙パックから直接牛乳をぐびぐびと飲む。

これは彼女の日課である。

我ながらぺったんこと言うにふさわしい胸。ちょっとしたコンプレックスである。

睡蓮は未だに寝ぼけ眼のまま時間を確認。AM5:36。
訓練開始時間はAM7:00であるから、余裕のある時間帯だった。

だからと言って二度寝するほど睡蓮は平和ボケていない。

手早く機動六課の制服、ではなくケルベロス小隊専用の、それぞれのパーソナルカラーのラインが入った軍服に近い制服を着る。睡蓮は赤、綾乃は黒、フローラは黄である。

そして、真っ赤に染めた髪を染め直すべく洗面台に向かおうとして、染料を買い忘れたことに気づき、舌打ちを一つ。

仕方なしに苛立ちたつぷりと言わんばかりに、ドカッと椅子に腰を

下ろしてタバコに火をつける。

すっぱ——っと、大きく一息／至福の一時。

そのままろんげな瞳で部屋を見渡すと、綺麗に整頓された部屋が目に入る。

綾乃も、このくらい片付けろよなーっと思いがちらつく。

綾乃〃大の片付け下手。

「睡蓮、起きてるか？」

思考のちらつきに引きずり出されたようなタイミングで、部屋にノックの音が転がった。

睡蓮は、一人でちょっとだけ笑いを漏らしながら、綾乃を部屋へと招き入れた。

* > 黒崎綾乃 □

少し早い時間帯だが、睡蓮は既に起きているだろうと思い、早朝の静寂に包まれる廊下を歩く。

ついにヤツの情報を掴んだ。胸の奥からせりあがる興奮と憎悪が抑えきれない。

本当ならばフローラにも話しておきたいが、事が事だけに他人に聞かれない話ではない。

故に睡蓮には今日の朝。フローラには今晚、それぞれの個室にて秘密裏に話す必要がある。

さらに言えば、我々には【このこと】に関する調査を行う権利が無い。

つまり、時空管理局自体への反逆に近い行為であるとも言える。

最も、結果さえ出してしまえばどうと言うことはないのだがな。

私は、思考する没頭する内に睡蓮の部屋に到着。

口元に、暗黒の笑みを浮かべた。

二回のノックと、それに応える睡蓮の声。

睡蓮の普段の生活態度からは考えられないほど整頓された部屋に、厳重な盗聴防止魔法をかけて、椅子に座ってタバコをくわえる睡蓮を見据える。

「随分と嬉しそうじゃねーか。いや、逆か？　まあいい。朝っぱらからあたしに何のようだ？」

ケルベロス小隊の隊長たる睡蓮は、不適な笑みを浮かべている。こちらの要件など知り尽くしているとでも言うように。

実際この案件の依頼主は、睡蓮であるようなものだが。

「ヤツの居場所が分かったぞ」

ほう、と睡蓮は目を細めた。無言でさらに続きを促す。

「ヤツは今、夏の雪計画と呼ばれるプロジェクトに携わっている。プロジェクトの内容までは不明だが、公に姿を現すことには間違いない。十分に殺れるだろう」

「情報の提供元は？」

「インターセプターの、ティアナ・ランスターだ」

若干の苛立ちが睡蓮から立ち上る。

「ネクラ野郎と一緒に機動六課に来たオレンジ頭かよ？」

「その認識で違いない」

私は笑いを抑えきれず、吹き出した。確かに認識は間違っていないが、オレンジ頭はないだろう。それで言ったら、お前は赤頭だ。

「何か言いたそうだな？」

「別に」

怖い怖い。

「とにかく、だ。あたし達ケルベロス小隊には、ヤツら時空監視局の重鎮との戦闘行為は許されていない。広告塔であるあたし達を失うワケにはいかないからな。だが、広告任務みたいなモンだよ、これは。何せ仇討ちだからな」

違い無い。多分に感情に動かされている感は否めないがな。

「よーやくだ。必ずブチ殺してやるぜ。フュリオの野郎」

寒気を催す笑みを浮かべ、睡蓮はタバコを灰皿で揉み消した。

戦争屋、フュリオ。エルマの仇。

間違いなく、この上なく、残忍に殺害してやるよ。

私達は静かに闇色の決意を固めた。

「おやおや、ワタシに客とは珍しいな」

薄暗い密室。時空管理局の拘置所。シュガーは一人の男と相対していた。

「僕だつて、あんたに会いたくて会っているワケじゃない。けれど、あんたにしか出来ない仕事がある。もちろん、そのために此処から脱獄するための手引きをしよう」

「ほう……。ワタシもここでの暮らしには飽きていた所だね。話しを聞こうじゃないか。何せワタシの弟のような存在の息子でもある君の頼みでもあるしね」

男の発言に、シュガーは顔をしかめた。

「その言い方はよせ」

「済まないね。して、要件は？」

「オリハルコンβ、神の血石の復元。あんたならできるだろ？
ジェイル・スカリエッティ」

「もちろんさ。弟に出来てワタシに出来ない道理は無い」

「そうかならば行こう。いつまでもここに留まる理由が無い。いくら僕でも、ここにいつまでもいれば発見されてしまうからな」

「随分と切羽詰まっているようだね？　ワタシに協力を求めるなんて」

「一応、技術に関してはあんた以上に信頼できる者はいない」

「違うない」

くくく、とスカリエッティはくぐもった笑いを漏らす。

それから数秒もしないうちに、その部屋は空室になった。

19 / black determination

「誰もが幸せな世の中ってのは、本当に可能だと思いまつか？」

「いや、不可能でしょうね。人間の欲望に限りは無い上に千差万別です。そんな人間達が漏れなく『幸せ』になるのは不可能ですよ。まあ私は、それを求める人間の姿勢は興味深いと思いますし、ベネディクティンにはそれができる力があるかもしれません」

「と言うことは、ジェイスはベネディクティンの力に惹かれてこのクーデターに参加したクチでっか？」

「その質問の答えは、イエスであり、ノーであると言ったところでしょうか。何故なら私は■■■■■なのですから」

「おまつ！ そんなことワイに言っただええんか!？」

「構いませんよ。死に行く貴方に言ってもね」

「はあ？ 何を言っ——」

「——よう、敵討ちに来たぜ、カス野郎」

「死ぬ準備はできたか？」

「貴方を、倒します！」

> 黒崎綾乃

私達の現在の住まいは、機動六課の隊舎から離れ、インターセプター提供の仮隊舎となっている。

機動六課は襲撃事件後、『本当の意味で』再設立されており、ティアナ・ランスターを除いた旧フォワードメンバーが私達の代わりである。

まあ、私達にはあまり関係の無い話した。事実上、お払い箱になったわけだし。

八神元部隊長が、本当に申し訳なさそうにしていたが、それだけ。もはや何の意味も無い。

私達はケルベロス。殺人を繰り返す地獄の獣だ。

迷ってはならない。その瞬間に私は戦えなくなってしまう気がするから。

閑話休題。

私達三人は今、夜のクラナガンを駆け抜けている。

デバイス・特甲Ⅱ武装済み

目標はフュリオと名乗る傭兵が潜伏するという、港の一角にある倉庫だ。

あの日、あの時、エルマを殺したヤツを、私達の手で殺す。

殺害という行為をもってしか、きっと私達もつと先に到達するのは不可能だから。

しばしの疾走の後、私達は闇夜に包まれる港に到着した。

昼間はあるなにも残暑厳しく、黙っていても汗がしたたるような熱気に包まれていたというのに、ここは酷く寒い。

全身が震え、歯が噛み合わない。

「落ち着いてください、綾乃ちゃん。大丈夫です。私達は死にませ
ん」

肩の温かい感触に気づくと、私を癒す笑顔を向けるフローラ。

以前、綾乃が言っていたフローラの電波的勘が発揮しているらしく、私が最も怖れることを言い当てた。

これはもはやテレパシーの域だ。

「ああ分かってる。解っているさ」

そう思うのも、私の震えが既に止まっているから。

「行くぞ。あたし達の戦いを始めにな。んでもって、頭を欠くことなくケルベロスは帰還するんだよ。コトのあと、大量の始末書+何かしらの処罰を食らいにな！」

睡蓮が獰猛に笑う。まったく、前はヤツを倒しきれなかったというのに、どこからそんな自信が湧いてくるんだか。

けれど、まあ、悪くない。

私達三人ならば、死ぬまで駆け抜けて行けそうな気がする。

そうさ。

これから行われる行為【殺人】は、明日への踏み台に過ぎない。

「雷撃値、46ってトコか」

眩き、爆音＋甲高い音＋最後に鉄製の扉が地面に叩きつけられた音。

道は、拓かれた。

「――よう、敵討ちに来たぜ、カス野郎」

「死ぬ準備はできたか？」

「貴方を、倒します！」

この決意〃殺意を胸に、私は静かに抜刀した。

20 / bloody black

> 黒崎綾乃

驚愕の表情を浮かべるフュリオと対峙した私達は、油断なく各々の構えを取る。

私は愛刀を正眼に構え、睡蓮は攻撃的にファイティングポーズ。フローラは、普段使用するスナイパーライフルではなく、サブマシンガン型の特甲を構える。

「おやおや、お客様のようですね。私はここでおいとましますよ。フュリオ、貴方のお客様のようですからね」

フュリオの隣に居た男——フードを深々と被っているために断定は出来ないが、声の質からしてそうだろう——が転移した。

ありがたい。敵は少ないなら少ないだけいい。

「今の声……………」

フローラがフードの男に一瞬気をとられたが、すぐさまフュリオに集中する。

対してフュリオは、驚きの表情を潜ませ、愉悦の笑いを浮かべる。
下衆め。

「あー、丁度部下をインターセプターに殺されて苛ついたとこやし、憂さ晴らしには丁度ええ。――かかってこいや」

それが合図となった。

私と睡蓮が同時に飛び出し、フュリオに肉迫する。

フローラは弾けるようにサイドステップ。そして私達を巻き込まないように角度を調整し、マシンガンを斉射。

「――ッは！」

猛火の如き速攻。平原を焼き払っていくようなそれらを、フュリオは一笑に伏した。

「特甲レベル3、転送や！」

瞬間、私達を飲み込む閃光。

そして、フュリオを赤黒い鎧が包み込む。

顔にはフルフェイスのメット。

両腕には巨大な剣。

足の指に当たる部分には、強烈な踏ん張りを可能にする鉤爪。

「……………fuck」

フローラの魔力弾の直撃で無傷な上、それぞれの手にある剣で私の刀と睡蓮の拳は止められてしまった。

「さあ、行くでえ……………ガキども」

>睡蓮・ナユタ・シュレイリンガー

冗談しゃねエ……………！

なんだよ。なんなんだよ。レベル3だって？　あたしはそんなものの知らない。

特甲にはレベルなんてモンがあんのか？　あたしの拳は低レベルだってか？　ふざけんじゃねえ。認めてたまるか。あたしは、あたしの拳は、テメエなんぞ――

「くうううだいてやんよ！―」

一度止められても構わない。アイツの糞ヅラに一発でもぶちこめればいい。

「無理や。無断や。諦めやあ」

湿度の高い声で、ヤツは言った。

あたしの拳がヤツの剣と打ち合い、火花を何度も散らす。

埒があかねえ。

「フローラ、実弾ライフルに換装しろ！」

「あ、はい。睡蓮ちゃん！」

マシンガンじゃあの装甲は貫けない。だがライフルならば可能。ましてや実弾ならな。

「……………」

しかしなんて野郎だ。あたしと打ち合いながら、一旦後退した綾乃や距離を取って換装中のフローラにさえ警戒を緩めていない。

「威勢はエエけどなあ、それじゃあワイは倒せへんぞ！」

分かってるっつーの。

だが、決めてが無いのは事実。どーしたもんか。

「考え事してるとこワリイけどなあ、終わりにするで」

んなワケ……………

「って、んなもんアリかよ……………」

「ええツツコミやで、自分」

ヤツの手に握られている二本の剣が電撃を纏う。

密着していたあたしは、その電撃をまともに喰らう。

脳みそがショートして、目の前がチカチカする。

「睡蓮！」

そんな隙を奴が見逃す筈もなく。

「……………」あ

あたしとヤツの間にその体を滑り込ませた、綾乃を切り捨てた。

「す、いれん、だいじょうぶ、か？」

体から刃を生やしながら、綾乃はそんなことを言った。

黒を基調とした綾乃のケルベロス小隊服が、自身の血液で染まってい

く。
「なんや、ユウジョウってやつかいな？ 胸糞悪い。ヘドがでるわ」

刃が引き抜かれ、そこから血が噴き出す。

それは、あの時の再現のようで――

――あたしの意識は、そこで真っ赤に途切れた。

《脅威の増大により高度兵装が許可されました。戦時状況下での行動を承認。戦闘員のアクセス権限拡大。バランスを解除。【特甲レベル3】の転送を許可します》

21 / b l a c k × b l o o d × b l a d e = c r a z y r e d

> 黒崎綾乃

自分の目が信じられなかった。
これが、レベル3の力。

「くっ………そ」

その強さを、その魂の煌めきを、私は目に焼き付けようとするが、
だんだんと瞼が落ちていく。

それも仕方ないこと。体から流れ続ける血液は、私から生命力を奪
う。

睡蓮。悪いが少し休むぞ。私が起きたらお前の死体でもあってみろ。

絶対に、ゆる、さん………ぞ。

……………。

＊

ただ、気持ちいい。それだけが睡蓮の脳内を支配していた。

湧き上がる全能感。常識を遥かに凌駕した力。

脳みそがフワフワして、自然と笑みがこぼれる。

「ありえへん」

とはフュリオの弁。それは、時空管理局が生み出した闇への賞賛か。

睡蓮は何も言わない。否、何も言えない。必要がない。

レベル3のコンセプトは、【皆殺し】。兵器に心は要らない。魂レベルにて、破壊と殺戮への愉悦が支配する。

瞬間。睡蓮がブレた——ように見えた。

視覚がソレを捉えた頃、フュリオは飛んだ。

否。吹き飛ばされた。

睡蓮の拳が触れたわけではない。単に——凄まじすぎる拳圧に触れたただけだ。

それだけ。そう、それだけ。それだけで周囲に風という形で暴力を撒き散らしていた。

フローラ「綾乃のもとへと瞬時に移動。シールドを展開しつつ、回復魔法。魔力バッテリーの残量なんぞシカトし、全力で行う。

額に汗がつたう。傷は深い。あらゆる【機能】を治癒と流れ弾の防御に使用する。

「睡蓮ちゃん！」

悲痛な叫びは、けれども睡蓮には届かない。彼女を支配するのは快樂。圧倒的な全能感。

脳みそがスパークして絶頂を無限に味わっている。

さらに疾走。音すら置き去りにした移動は、さらなる暴力を生み出す。

「なやめ」

それから、連打。

連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打。連打連打連打連打連打連打。

鈍痛。

鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛鈍痛。

血液肉内臓金属片脳工トセトラを撒き散らす。

それでも止まらない。フュリオの生命が停止しようとも止まらない。

「睡蓮を、だれか助けて……」

涙とともに、心の声が剥がれ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750m/>

coup d'Etat

2011年7月15日15時49分発行